

第3章 昭和40年代の「なつメロ」ブーム

3-1 東京12チャンネルの経緯

テレビ東京の前身である東京12チャンネルは、京浜地区最後のVHFテレビ局として昭和39(1964)年4月12日に開局した。東京12チャンネルが開局に到るまでの経緯を以下に説明しよう。

東京12チャンネルの開局から5年間の経営母体は、財団法人の日本科学技術振興財団であった。この財団は昭和35(1960)年4月に設立されたものであるが、その背景には、前年の昭和34(1959)年に、時の科学技術庁長官であった中曾根康弘が音頭をとり、政・財・学の結集による科学技術振興のための結合体を作ろうと提案したことがある。また、おりから、日立製作所の70周年を期に、当時の同社社長であった倉田主税が10億円の金を投じて、科学博物館の設立構想を発表していたが、昭和35(1960)年3月、この倉田を会長として、両者の構想が一致し、財団が設立されたのである。財団の役員メンバーには日本財界の首脳が豪華に並び、財団は、第一に科学技術館、第二に科学技術学園工業高校の運営にあたり、第三にテレビ局の運営によって、科学技術の振興にあたるという構想を練っていた。

ところで、昭和35(1960)年当時、京浜地区のテレビ局には、NHKが第一(総合)と第三(教育)、第四は日本テレビ、第六が東京放送(現在のTBS)、第八がフジテレビ、第十がNETテレビ(現在のテレビ朝日)と、NHK二局、民放が四局ひしめいていた。そこに、在日米軍が当時レーダー用として使用しており、京浜地区最後のテレビ用電波といわれた、VHF波の第十二チャンネルが日本に返還されることになった。この第十二チャンネルを巡り、次の五者が使用願いを提出した。河野一郎のラジオ関東、中小企業政治連盟・鮎川義介の千代田テレビ、毎日新聞と日本私立大学連盟の松下正寿の中央教育放送、東京タワーの前田久吉の日本電波塔、そして科学技術振興財団の五者である。四者とも有力候補であったが、昭和37(1962)年11月13日、郵政大臣より科学技術振興財団に対して予備免許が下り、昭和39(1964)年4月12日の開局に到った。

科学技術振興財団への免許条件は、科学技術教育番組が60%、一般教育番組が15%、教養・報道番組が25%という比率でテレビ番組を放送することであったため、東京12チャンネルは科学技術教育専門局としてスタートした。特に、全国の企業で働く2万人の若年技術者に工業高校卒の資格を与える通信制工業高校講座を放送したことは、テレビ界初の大胆な試みであった。だが、東京12チャンネルは開局以来、苦しい経営を続けていくことになる。『テレビ東京30年史』によると、「当初、テレビ協力会からの収入を月2億円、年間24億円として予算を計上していたが、結局、毎月数千万円の収入不足となり、開局から1年を経て13億8000万円の赤字を計上した」[テレビ東京30年史編纂委員会(1994:p.24)]とある。これの「主な原因としては、(イ)免許条件(番組編成上の制約から、教育番組の比重が高く、スポンサーの獲得が難しかった)、(ロ)人員増と人件費増、(ハ)製作費をは

じめ諸経費の増加などである」と、同書にあるが、経営難の原因は何と言っても、開局当初に抱いていた、他の民放テレビ局のように営利追求を目的としないで科学局として徹しようという理想の高さと、大衆もそのうち理解するだろうと考えていた、目算の甘さにあったと言えよう。(54) 当時の週刊新潮の記事による、「十二チャンネルは、もともと『振興財団』を母体に大手企業が『協力会』をつくり、『協力資金』を出し合って運営資金の大半をまかなはずだったが、これが予定の一割強しか集まらなかったのが、第一のつまずきという。こうなると、頼みの綱はスポンサーだが、今まで、オリンピック番組以外では、連続ドラマ『^{もみ}縦ノ木は残った』の六^{もみ}が、同局の最高視聴率といわれる。これでは、財団に義理立てするスポンサーにしても、“忍耐”の限度があろうというものだ。(中略) いずれにしても資金難の上に『教育的な番組を七五^{もみ}以上』という免許許可条件のワクに縛られたのでは、すでに全国にネットワークを確立し終わった既存テレビ局に太刀打ちできる道理がない。」(55) とあるのが象徴的である。昭和 41 (1966) 年には負債が 40 数億円に膨らみ、倒産寸前となったため、同年の 4 月 4 日以降、①社員の 40%に当たる約 200 名の整理、②1 日の放送時間を従来の 16 時間から 5 時間半に短縮、③科学技術番組の放送に徹し、営業活動は一切行なわない、という 3 つを 3 月の緊急理事会で決めた。結果、①200 人の人員整理は労働組合が激しく反発するところとなり、社会的にも関心を集める事件となったが、結局全職員 449 人のうち 183 人が財団を去り、②平日は「通信制工業高校講座」を中心とした教育・教養番組と 30 分のニュースに限定され、午前 10 時～11 時 30 分までと、休止時間を挟んで 17 時～21 時までの延べ 5 時間半、日曜日は午前と午後は放送休止、夕方 17 時から 4 時間という、それまでに比べてわずか 3 分の 1 の放送時間に短縮された。この放送時間 5 時間半の時代は、翌昭和 42 (1967) 年の 3 月まで 1 年間続き、以降は段階的に放送時間を延長していった。昭和 41 (1966) 年当時、東京 12 チャンネルはNHKに吸収されるのではないか、などの風評も多々流れるほどであったが、翌年からNHKや民放各局から番組を借り入れたり、プロ野球の中継や劇映画を放送するなどして、経営の再建に努力を重ねた。

東京 12 チャンネルの経営が改善し始めたのは、昭和 44 (1969) 年にテレビ事業本部の実質的運営が日本科学技術振興財団から日本経済新聞社に引き継がれてからのことである。営業収入が伸び始め、昭和 45 (1970) 年度には開局以来初めて営業活動による黒字を計上した。もっとも、その後も欠損金が増えたり業績が今一步のところでは振るわなかったりし、また、昭和 49 (1974) 年の石油危機の影響もあり、極度の経営不振は続いたが、昭和 50 (1975) 年に日本経済新聞社本社の業務取締役で電波事業を担当していた中川順が社長として就任したのを契機に、昭和 51 (1976) 年度を基点とする経営 3 か年計画で 7 割減資という荒療治を断行したのが功を奏し、昭和 54 (1979) 年 3 月に予定通り 3 か年計画が終了して再建も完了し、会社設立以来初めての二桁配当が出るところにまでこぎつけた。

以上が、東京 12 チャンネルが開局し、開局してからは極度の経営不振を乗り切ってきた

経緯である。こうした会社の中で誕生した番組が、昭和 40（1965）年 9 月～12 月放送の「歌謡百年」であり、「歌謡百年」を発展的解消させる形で昭和 43（1968）年 4 月から放送開始させた「なつかしの歌声」であった。

3-2 「なつかしの歌声」という番組

前節で述べたように、昭和 40 年代（1965～1974 年）の初頭に、流行歌の流行周期の短期化と、ファン層の低年齢化が目に見えて現れた。特にテレビの音楽番組は若者をターゲットにしたものが目立っており、30 代以上の人たちの需要に答えることは難しかったと言えよう。その中で、「なつかしの歌声」という番組が登場した。(56) これに関しては、『10 代 20 代の歌番はあるけど 40 代後半の人たちの歌番がない。絶対やろうよ、三枝ちゃん』昭和 42 年当時の制作責任者の三枝孝栄氏にお願いしたものです。』というコロムビア・トップの回想が物語っている。(57) 『テレビ東京 30 年史』（1994：p.36）

まず、「なつかしの歌声」の前身に当たる「歌謡百年」は、昭和 40（1965）年 9 月～翌年の 1 月まで、毎週金曜日 21 時 30 分～22 時に、3 ヶ月間だけ放送した。

東京 12 チャンネルでは、昭和四十年十月から「歌謡百年」という番組の放送を開始した。これは、おりから明治百年を迎えようとしていた際であり、それを機会に、明治初年から太平洋戦争終結の前後にいたるまでの“はやり唄”を集めて放送しようというのが一つのねらいであった。

ここで特に述べておきたいのはこの「歌謡百年」が、いわゆる“なつメロ”を系統的にテレビ化した、わが国では初めての番組であったということである。それまで他局にも“なつメロ”番組はあったけれど、いずれも単発か、せいぜい短いシリーズものか、あるいは新人歌手による“リバイバル”ものであった。

「歌謡百年」は、その最初の企画立案から制作放送の実施にいたるまでを三枝が担当、構成を永来が受持ってスタートし、年末、年始の特集番組をもふくめて十八回続いたが、昭和四十一年一月、いちおうその使命を果たして終了した。

内容は、その時代ごとの世相や出来ごとを、その頃のフィルム、写真、新聞雑誌記事、などを画面にはさみながら、これを司会者が説明し、そのあいだに当時はやった歌を入れていく、という一種の“風俗歌謡番組”であったが、重点はあくまでも“歌”とそれをうたった“歌手”においた。

本文中にも、いく度か触れておいたけれど、一この番組でとりあげる歌は、それを最初にレコードに吹込んだ歌手にうたってもらおう—というのが企画の基本的な線であった。そのために、“ひと探し”には随分と苦勞もしたが、またその反面、この番組を機縁に、歌謡界に復帰した人たちも何人かいる。〔三枝・永来（1970）、p276、太線部は引用者による〕

「歌謡百年」及び「なつかしの歌声」の番組プロデューサーは三枝孝栄、構成は永来重明が担当した。三枝孝栄は、昭和 27（1952）年に大学を卒業後 NHK に入社して、テレビ番組ディレクターとして演芸、音楽、舞踊、ドラマを担当した後、昭和 39（1964）年に東京 12 チャンネル開局と同時に同社に移籍した人物である。永来重明は、東邦文芸部、NHK 文芸部を経てフリー放送作家となった人物であり、NHK ラジオの「なつかしのメロディー」の構成もかつて担当していた。論者の三枝氏への聞き取りによると、「歌謡百年」は、当時の東京 12 チャンネルの科学技術教育専門局という方針に従い、明治、大正、昭和の社会世相と当時の流行歌、いわば歌謡史としてフィルムドキュメンタリーにするのが目的であったという。開局 2 年目という段階では、純粋な娯楽番組としての音楽番組を制作することは不可能であったのである。もっとも、上記引用にもあるように、三枝氏は、歌の部分は出来るだけ当時歌った歌手をスタジオに招いて歌ってもらうことを考えていた。また、3 ヶ月で終了してしまったのも、決して打ち切りというわけではなく、当初から 1 クール 13 回完結の予定でいたからだという。むしろ、昭和 41（1966）年の 1 月まで、計 17 回放送することになった (58) のは、視聴者からの反響が良く予定を延長したからだそうだ。そのような視聴者からの反響により、三枝氏は、いずれこれをレギュラーの歌番組にしたいと考えるようになった。

そして、昭和 43（1968）年になり、偶然放送の準備が整わない時間が出来、穴埋めとして 4 月から計 4 回の予定で、「なつかしの歌声」を放送することになった。この 4 回分の放送は穴埋めではあったが、既に構成の永来、司会のコロムビア・トップとは、いずれレギュラー番組にするための打ち合わせを始めていたという。そして、これも「歌謡百年」同様、視聴者からの反響が良く、計 4 回の予定が 17 回に延長した。この「仮放送」の期間は、4 月 3 日～5 月 8 日までが毎週火曜日 21 時～21 時 30 分、5 月 17 日～6 月 28 日までが毎週金曜日 22 時 30 分～23 時、7 月からは番組タイトルを「続・なつかしの歌声」とした上で、7 月 13 日～7 月 27 日までが毎週土曜日 23 時～23 時 30 分、8 月 3 日が土曜日 23 時 30 分～24 時に放送し、2 ヶ月休んだ後に 10 月から毎週火曜日 21 時 30 分～22 時の正式なレギュラー番組となった。この辺りの事情を説明する記事を以下にいくつか引用しよう。

40 代のための歌番

下村泰（コロムビア・トップ）氏

「10 代 20 代の歌番はあるけど 40 代後半の人たちの歌番がない。絶対やろうよ、三枝ちゃん」昭和 42 年当時の制作責任者の三枝孝栄氏にお願いしたものです。穴埋め番組としてスタートした「なつかしの歌声」が番組として定着しようとは。「今は亡き…」といえば、本人から実在の電話があつたり、カメラの前を通り過ぎて戻らぬ人のいることも悲しい現実です。“老いたる者には過ぎにし青春の郷愁を、若人には去^いにて再び
帰り来たらぬ^{いにしえ}古の幻を一”この番組の凄さは 30 年前のヒット曲を本人が歌っていた

ことではないでしょうか。『テレビ東京 30 年史』(1994 : p.36)』

歌謡番組と 12ch

藤山一郎氏

まず他局に先駆け「なつメロ番組」を汲んでいただいたことに対して深い敬意を表します。昭和 40 年「歌謡 100 年」、^マ42 年「なつかしの歌声」そして現在まで続く「年忘れにっぽんの歌」などです。大晦日の「年忘れ…」の第 1 回は神田共立講堂からの生中継で、当日は今のようなカラーでなくモノクロ放送。演出、カメラ、照明の皆さんとても大変な時代でした。12ch と共に歩んだ私自身も感無量、今は昔の物語です。『テレビ東京 30 年史』(1994 : p.28)』

今年四月から始った東京 12 チャンネルの「なつかしの歌声」(火曜、夜 9・30) が好調をつづけている。戦前、戦中に流行した歌、しかもその人の持ち歌とはいえ平均年齢が五十一六十代の歌手が歌う番組が、これほどきかれるとは同局も予想しなかったという。今年の上旬として、三十一日の大みそかには、東京・神田の共立講堂でレギュラー歌手が勢ぞろいして「なつかしの歌声」大会を開くことになっている。

^マ七十二歳の東海林太郎を筆頭に藤山一郎、霧島昇、美ち奴、勝太郎らがレギュラーで歌うこの番組は、昭和四十年九月から四十一年^マ四月まで放送した「歌謡百年」を、今年四月に「なつかしの歌声」として復活させたもの。「この四月にアナウメ番組として一カ月四回だけやってみよう」とスタートしたのが、反響が大きくて七月まで十七回もやった。八、九月は放送を休んだが“つづけてくれ”という注文があちこちからきましてね」と局側はいう。十月に再スタートした当時、同局としては記録的な視聴率をかせいだ。

三十代以上のオールドファンが視聴者だが「親とみていて好きになった」という若いファンもいる。視聴率が高くなるのは戦前、戦中のヒット曲だが、なかでも軍歌はとくに反響があり、放送が始ると局へ電話がかかってくるほど。「いまの若い者はたるんでいるからやってくれ」「暗い思い出につながるからやめて」と賛否両論あるが、否定的な声は五通に一通の割りという。(中略)

「落ちついた歌謡曲をきく機会がないこと、三十代以上の人の思い出をつづる歌番組がほかにないことが人気の集中した原因でしょう」と担当の三枝プロデューサーはいつている。「大もてのなつメロ」、『朝日新聞』昭和 43 (1968) 年 12 月 25 日夕刊、p.8)

なつ・メロ歌手をこれだけ一同にそろえられるのは、また東京 12 チャンネルをおい

てはあるまい。「この番組がスタートした四十三年はグループ・サウンズが全盛だった。テレビ局はどこでも、G・Sに目の色を変えていたもので、大人が聞ける歌番組がなかった。まあ、一種の挑戦だったのかな。幸いうちでは“歌謡 100 年”という歌でつづる風俗史みたいな番組が前にあったんですよ。古い歌手にこれで渡りがついていたから、人集めには問題なかった」

最初は七回ぐらいの“特番”でやるつもりが、フタを開けてみて、予想外の人気。さっそくレギュラー番組に昇格。「超ワイド特集 生きていた思い出の歌謡曲——第 1 部 爆発したなつ・メロブームの稼ぎ頭は？」、『週刊 TV ガイド』昭和 45 (1970) 年 8 月 7 日号, p.30)

さて、この「歌謡百年」が発展的解消をして、二年後の昭和四十三年四月に装いを新たにして登場した番組が「なつかしの歌声」である。その後約一か月間休んだが、十月第一週から再び「なつかしの歌声」として放送開始され、現在にいたっている。この本の出版される時点では、おそらく通算百回を越していることになる。この間に迎えた昭和四十三年の大晦日には、東京神田の共立講堂から二時間にわたって、また、昭和四十四年の暮には歌舞伎座から三時間にわたって、年忘れの特集番組をそれぞれなま中継した。とくに、歌舞伎座のときは、東京 12 チャンネルとしては初のカラー中継放送であった。この二度にわたる年末の特別番組は絶大の反響を呼び、視聴率も抜群であった。

さて、この「なつかしの歌声」は、先の「歌謡百年」とは別に、新しい発想の企画のもとにスタートした。そのいちばん大きな相違は、とりあげる歌の年代を昭和の初期から、終戦を中にはさんで、昭和三十年代にまでにかぎり、明治・大正時代はいちおう割愛したことと、「歌謡百年」におけるような時代的説明はできるだけ簡略にし、“歌”本位の、そして最も素朴な形での“なつメロ”番組にころもがえをしたことである。しかし、そのとりあげる歌は、それを最初に歌った歌手で……という一線だけはくずしていない。一もつとも、中には故人となったり、現役を退いてマイクから遠ざかっている人たちのうたった歌のなかにも、ずいぶんとヒット曲がある。それは“リバイバル”という形でとりあげた。しかし、これは本来の企画からいえば例外に属するものである。〔三枝・永来 (1970), p276〕

「歌謡百年」はあくまでも社会世相史番組という意味づけでの番組であったが、「なつかしの歌声」では、純粋な音楽番組として企画構成することができた。以下の表 4 は、昭和 44 (1969) 年 9 月 29 日～10 月 5 日の 1 週間に放送されたテレビ各局の音楽番組のうち、視聴率が 10%を超えたもののリストである。当時関東地区で放送されるテレビの音楽番組は 50 本を越えていたが、その中であって「なつかしの歌声」は、決して低くない視聴率を獲得していたということが分かる。(59)

■各局の主な歌謡番組のうち、視聴率10%を超えるもの

—ビデオ・リサーチ調べ—

関東地区（9月29日～10月5日）

放送局	番組名	月日	曜日	時間	視聴率%
N H K	歌の祭典	10/5	日	19:30	14.7
"	ふるさとの歌まつり	10/2	木	20:00	19.4
日本テレビ	ゴールデン・ショー	10/5	日	18:00	12.8
"	シャボン玉ホリデー	10/5	日	18:30	16.9
"	スターと飛び出せ歌合戦	9/29	月	19:30	18.9
TBSテレビ	歌のアルバム	10/5	日	12:45	10.3
"	歌のグランプリ	9/30	火	20:00	15.0
"	ヒット中継車	10/3	金	19:00	10.3
"	★八時だヨ全員集合	10/4	土	20:00	12.9
フジテレビ	夜のヒットスタジオ	9/29	月	22:00	29.7
"	★夜のゴールデンショー	10/1	水	19:00	16.8
"	今週のヒット速報	10/3	金	20:00	11.8
NETテレビ	スターものまね大合戦	10/5	日	19:30	20.9
"	歌のグランド・ヒットショー	10/1	水	20:00	12.7
東京12チャンネル	なつかしの歌声	9/30	火	21:30	12.2

★印は10月新番組としてスタートしたもの

(表4 「各局の主な歌謡番組のうち、視聴率10%を超えるもの」, [野村(1969:p.19)]
の表による)

「なつかしの歌声」は、昭和43(1968)年10月から45(1970)年9月までは毎週火曜日21時30分～22時に、昭和45(1970)年10月から46(1971)年3月までは毎週火曜日21時～21時30分に、昭和46(1971)年4月から同年の6月までは毎週土曜日22時～22時30分に、昭和46(1971)年7月から同年の9月までは毎週木曜日23時～23時30分に、昭和46(1971)年10月から同年の12月までは毎週土曜日22時～22時30分に、昭和47(1972)年1月から同年の3月までは毎週日曜日22時～22時30分に、昭和47(1972)年4月から同年の9月までは毎週土曜日22時～22時30分に、昭和47(1972)年10月から同年の12月までは毎週日曜日22時30分～23時に、昭和48(1973)年1月から同年の3月までは毎週土曜日20時～20時30分に放送し、いったん放送を終了する。その後、昭和48(1973)年4月から9月までは、毎週土曜日20時～21時まで、「思い出のヒット曲」

という、「なつかしの歌声」と同内容の番組を放送し、昭和 48（1973）年 10 月から翌年の 3 月には「なつかしの歌声」に再び番組名を戻して毎週日曜日 22 時 30 分～23 時に放送をし、2 度目の最終回を迎えた。結果、6 年間放送は続いた。以上が通常枠での放送であるが、大晦日に NHK の「紅白歌合戦」の裏番組として放送する特別枠での放送は昭和 43（1968）年から、夏の特別枠での放送は昭和 45（1970）年から、それぞれ現在まで続いている。(60) 特に、大晦日の特別番組は、当時視聴率 70% 台を誇っていた NHK の「紅白歌合戦」の裏番組でありながら、昭和 43（1968）年が 11.0%、同社として初のカラー生中継で放送した昭和 44（1969）年が 10.9%、昭和 45（1970）年が 12.8%と、二桁の視聴率を獲得したことは、当時以下のように話題になった。(61)

因みに昨年この<紅白歌合戦>の裏番組として<なつかしの歌声大会>を放送、一・一%の視聴率を上げ、“紅白”のため不振の民放局にあって気を吐いた東京 12 チャンネルが今年は時間を広げ、内容も拡張して、あくまでも歌を主体にした番組、演出も意識して初期的手法で茶の間に訴えかけるという。果たしてこれもみものである。
〔野村（1969：p.22）〕

なつ・メロ・ブームの火付け役はなんといっても東京 12 チャンネル「なつかしの歌声」。この八月四日には百回記念で二時間のワイド番組を放送する。

いまや、名実ともに東京 12 チャンネルの看板番組。大晦日の「なつかしの歌声・年忘れ大行進」は NHK の「紅白歌合戦」のかんげいすべからざる裏番組になっている。「超ワイド特集 生きていた思い出の歌謡曲——第 1 部 爆発したなつ・メロブームの稼ぎ頭は?」、『週刊 TV ガイド』昭和 45（1970）年 8 月 7 日号, pp.29-30

この“紅白”の独走のかげで泣いたのは東京 12 チャンネルを除く民放各局。「巨泉まとめて百万円」（一・二%）「細うで繁盛記」（一・九%）「帰ってきた歌謡曲」（一・〇%）＝以上日本テレビ、「旧作映画・鳥」（四・〇%）＝TBS テレビ、「同・ナイスガイ」（〇・三）＝フジテレビ、「同・恐怖の蠟人形」（二・二%）＝NET テレビと、裏番組のいずれもが枕をならべて討ち死といった恰好。

そんな中であって、ひとり健闘ぶりをみせたのが東京 12 チャンネルの恒例「なつかしの歌声」。第一回目の一一%、前回の一〇・九%を上回る一二・八%の最高記録をマーク、局関係者をこおどりさせている。開始当初の七時台では一三・四%、八時台で一六・八%をあげ“紅白”が始まる九時台で七・四%とグッとさがってはいるものの、これとても、前回からくらべれば二%もあがっており、さらに“紅白”の九時台九一・五%、十時台七九・五%という点を見ても「“紅白”開始当初はうちが大分くっていたことがわかる」（東京 12 チャンネル広報上村氏）とあって、喜びはひとしおといったところ。もちろん、中継会場となった歌舞伎座は「ことしはじめて三階席にも観

客を入れたがそれでも会場に入りきれないでお引きとり願った（同局編成部）ほどの大盛況。これに気をよくした同局は「なつメロ」が落ち目なんてデマ。今年の大みそかもこの番組を“紅白”にぶっつけます」（同）と早くも“紅白”に挑戦状をたたきつけるほどのハナ息の荒らさをみせている。（「若返りが成功した紅白歌合戦——“紅白”を食った『なつかしの歌声』、『週刊 TV ガイド』昭和 46（1971）年 1 月 1 日／1 月 8 日合併号，pp.32-33）

以上のように、東京 12 チャンネルは、「なつかしの歌声」という番組によって、昭和 40 年代（1965～1974 年）の日本に「なつメロブーム」と呼ばれる現象を創出していった。

3-3 「なつかしの歌声」の特徴

それでは、「なつかしの歌声」が昭和 40 年代（1965～1974 年）に築いた「なつメロ」ブームとはいかなるものであったのか。また、どうして「なつかしの歌声」は「なつメロ」ブームを築き上げることに成功したのであろうか。このことを考えていくにあたり、前の節で引用した三枝・永来（1970）をもう 1 度読み返そう。

ここで特に述べておきたいのはこの「歌謡百年」が、いわゆる“なつメロ”を系統的にテレビ化した、わが国では初めての番組であったということである。それまで他局にも“なつメロ”番組はあったけれど、いずれも単発か、せいぜい短いシリーズなのか、あるいは新人歌手による“リバイバル”ものであった。（中略）

本文中にも、いく度か触れておいたけれど、一この番組でとりあげる歌は、それを最初にレコードに吹込んだ歌手にうたってもらおう—というのが企画の基本的な線であった。そのために、“ひと探し”には随分と苦勞もしたが、またその反面、この番組を機縁に、歌謡界に復帰した人たちも何人かいる。〔三枝・永来（1970：p276）〕

「歌謡百年」及び「なつかしの歌声」の制作者は、自分たちが初めて日本において系統的な「なつメロ」番組を作ったのだということを自負している。果たして本当にそうであったのだろうか。論者は前章で、NHK ラジオの「なつかしのメロディー」が最初の「なつメロ」番組であり、以降これを皮切りに、NHK や民放各社で次々と「なつメロ」番組が作り上げられていったという事実を指摘した。例えば、昭和 39（1964）年の朝日新聞のコラムに以下のようなものもある。

◇根強い“ナツメロ”番組◇

海（日本短波「5 時です漁船の皆さん」「海上ダイヤル」）や山（日本短波「今夜は現場の皆さん」）や主婦（文化「奥様電話リクエスト」）からのリクエストはナツメロ曲（なつかしのメロディー）が圧倒的。NHK ラジオ①の「私の音楽アルバム」（水、昼）

担当者も、四月から船頭小唄が四回だ、と有名人のナツメロ趣味に驚いているし、NHK ラジオ①の「歌は結ぶ」(月、夜)のゲストの有名人にもナツメロ・ファンが多い。

若い日の思い出と故郷への郷愁がある限りナツメロは消えないし、TBS ラジオの「歌のない歌謡曲」が開局以来の長期番組であるのもナツメロの根強さを語っている。

しかし典型的ナツメロ番組は歌手と歌を直接に結びつけた NHK テレビの「黄金のいす」(木、夜)と文化の「歌で歩む 50 年」(日、昼)「あの夢この歌」(土、夜)だけ。近ごろはリバイバル趣味というより、近代的編曲で、ナツメロ曲を聞き直そうという名曲保存運動のような性格に変ってきた。各局の音楽番組担当者も、アメリカでスタンダード・ナンバーが繰返して出ているのと同じように当然の成行きだ、としている。

TBS ラジオの「歌のない歌謡曲」文化の「思い出のメロディー」(朝)ニッポンの「歌なし歌謡曲」(朝)「あの日の歌」(朝)「奥さまへの軽音楽」(朝)のように、メロディーだけのものや、NHK テレビの「黄金のいす」NHK ラジオ①の「歌は結ぶ」文化の「クラリネットと歌おう」(朝)「思い出のメロディー」ニッポンの「にっぽんの歌」(朝)「あの日の歌」のようにバンド演奏やナマの歌の番組が多いのも、ナツメロ曲を大事にしようという気持のあらわれである。

移り変わりのはげしい流行歌の中から現在にまでつながっているいい曲を今日的な感覚で聞かしているいまのナツメロ番組は音楽番組の中でしっかりした地位を築いている。(『朝日新聞』昭和 39 (1964) 年 7 月 20 日朝刊, p.7) (62)

このように、東京 12 チャンネルの「歌謡百年」や「なつかしの歌声」が放送される以前から、テレビやラジオにおいて「なつメロ」番組は存在していた。しかしながら、東京 12 チャンネルの「なつメロ」番組と、それ以前の「なつメロ」番組を明確に区別する差異が存在している。それは、「番組でとりあげる歌は、それを最初にレコードに吹込んだ歌手にうたってもらおう」という、「歌謡百年」や「なつかしの歌声」の制作者の基本線にも表れているように、往年のオリジナル歌手を再評価して権威づけしていこうという流れであった。この点に関しては、三枝・永来 (1970) の発刊に際して寄せられた東海林太郎の「推薦の辞」にも顕著に表れている。

東海林太郎

推薦の辞

東京 12 チャンネルの名チーフ・プロデューサー三枝孝栄氏発想による「なつかしの歌声」は、歌声という所に味わいがある。なつかしの歌、^{いわゆる}所謂なつメロではない。なつメロなら誰が歌ってもかまわないが、歌声ともなれば最初に歌った歌手が歌わなければならぬ。かく申す小生も幾度もお世話になっている。だから褒めるんじやないが

楽しく歌い、思い出深く聞かせて戴いている。〔三枝・永来（1970：p.11）〕

なつかしの“メロディー”ではなく、なつかしの“歌声”であるというわけである。前章で見てきたように、昭和 30 年代（1955～1964 年）のリバイバル・ブームは、主に若手歌手がリバイバルしていたし、リズムも現代風にアレンジされていた。上記朝日新聞の記事で紹介されている「なつメロ」番組も、大半は歌なしのメロディーだけのものや、歌付きのものであったとしても、「現代の」歌手がリバイバルしていたものであろう。しかも、「近代的編曲」も施されていたとある。それに対して、「歌謡百年」及び「なつかしの歌声」では、「なつメロ」を必ず「最初にレコードに吹込んだ歌手にうたってもらう」ことを基本線にしていたし、編曲もオリジナルに忠実であった。

もっとも、昭和 24（1949）年～昭和 35（1960）年まで NHK ラジオで放送していた「なつかしのメロディー」も、「なつメロ」を歌うのは基本的に「最初にレコードに吹込んだ歌手」であったし、昭和 41（1966）年 3 月まで NHK テレビで放送していた「黄金のいす」は、ベテランの作曲家・作詞家・歌手をスタジオに招いて話を聞く、というものであった。まず、「黄金のいす」に関しては、実際に現在視聴できるわけではないので確実なことは言えないのだが、あくまでもゲストから話を聞くというのが主体であり、歌を歌ってもらうというのは副次的なものに過ぎなかったのではないだろうか。それに対して、「歌謡百年」は、風俗歌謡番組とは言っても「重点はあくまでも“歌”とそれをうたった“歌手”におい」ていたし、「なつかしの歌声」でも、ゲストから話を聞くのは副次的なもので、歌を歌ってもらうことに重点を置いたものであった。(63) まさに「歌謡百年」と「なつかしの歌声」は、往年のオリジナル歌手が歌を歌っている姿を人々に見せることで、「なつメロ」ブームを築いたと言えるであろう。

次に、NHK ラジオの「なつかしのメロディー」に関してであるが、これは生中継放送であり、最初にレコードに吹き込んだオリジナル歌手が現役の場合にはスタジオに呼び、歌ってもらった。明治・大正時代の歌のように、「この歌にはこの歌い手」といった明確な歌い手が存在していなかったり、最初にレコードに吹き込んだオリジナル歌手が既に亡くなっているか現役を引退している場合には、代わりの歌手及び合唱団がリバイバルをするという形をとり、レコードをかけて代用するといったことはほとんどなかった。「なつかしのメロディー」の放送によって「なつメロ」ブームにまでは到らなかった理由には、第一に、それが放送されたのが昭和 20 年代（1945～1954 年）～30 年代（1955～1964 年）の前半であったということにあるだろう。昭和 40 年代（1965～1974 年）とは違い、まだ流行歌の流行周期の短期化とファン層の低年齢化が起こる以前であり、中高年層が「なつメロ」にすぎりつく必要性がなかったということもあるだろうし、この当時においては、戦前デビューの歌手も流行歌や芸能界の世界ではまだまだ第一線で活躍しており、これらの歌手に対して懐かしいと思う感情が芽生えなかったという点もあるだろう。特に後者に関しては、「なつかしのメロディー」に出演する歌手が、他方で「今週の明星」や「黄金の椅子」

などの、他の人気音楽番組にも普通に出演するような時代であり、彼らはまだ忘れ去られた存在ではなかった。(64) 歌に対しては“懐かしい”と聴取者に思わせることができても、歌手に対しては“懐かしい”という感情を呼び起こすことはできなかつたと言えよう。第二に、「なつかしのメロディー」の放送メディアがラジオであったということも影響しているであろう。ラジオというメディアは、人々に音声を伝えるに過ぎない。「歌謡百年」及び「なつかしの歌声」において、往年の歌手が歌っている姿を初めてブラウン管で目の当たりにし、自分の青春時代の思い出をよみがえらすことが出来たファンも多かったであろう。

3-4 「なつかしの歌声」の番組の工夫

「なつかしの歌声」は、往年の歌手を世間に再評価・権威づけさせるに当たり、どのような工夫を凝らしたのであろうか。〔三枝・永来（1970：p276）〕に、「“ひと探し”には随分と苦労もしたが、またその反面、この番組を機縁に、歌謡界に復帰した人たちも何人かいる。」とあるように、同番組では、「番組でとりあげる歌は、それを最初にレコードに吹込んだ歌手にうたってもらおう」ということを徹底するために、既に流行歌の世界を引退している人物を引っ張り出すということを行なった。塩まさる、小野巡、児玉好雄、羽衣歌子、石井亀次郎、酒井弘は、ともに昭和戦前期にデビューした歌手であるが、戦後は芸能界を引退して消息が分からなくなっているのを、番組で探し出してスタジオに呼び、歌を歌ってもらった。

東京 12 チャンネルでは、「なつかしの歌声」にぜひこの「九段の母」を塩まさるの歌唱でブラウン管にのせたいと思い、彼の所在を探してみたが、全く不明であった。三枝プロデューサーと私とは、ふたたび手分けをして心当たりに照会してみた。その結果、戦死したとか、伊東で温泉旅館を営んでいるとか、神田の電気会社に勤めているとか、答えはまちまちであった。神田の会社の名前と電話番号を調べて問い合わせたところ、“たしかにうちの会社にいたことがありますが、退社後の消息はわかりません”という返事であった。

——ところが、思いもかけず、塩まさる本人から、三枝プロデューサーのもとへ電話がかかってきた。…東京 12 チャンネルで彼を探している、という噂が、前述の会社の、昔の同僚の口からでも彼の耳に入ったのであろう。こうして意外な機会から、彼の所在がわかり、「九段の母」は、昭和 43 年 6 月 5 日、はじめて「なつかしの歌声」の電波にのったのである。〔三枝・永来（1970：p.215）〕

この児玉好雄も、東京 12 チャンネルの「なつかしの歌声」に是非出演してほしい人であった。その話が出た当時、やはり所在不明であった。

とにかくビクターからキングへ転じたことまでわかっていた。私は親しくしているキングの作曲家細川潤一（「ああわが戦友」「マロニエの木陰」などの作者）のもと^{ママ}電

話してみた。消息はすぐわかった。児玉好雄のお嬢さんの結婚式に、細川潤一が仲人をつとめたというのだった。

そこで出演の交渉にかかったが、病後の静養中とかでなかなか承諾を得られなかった。正直いって、彼はテレビ出演にはあまり気が進まなくて躊躇していたらしい。それというのも、昔の彼を知るファンのイメージをこわしたくない、というのが本音のようだった。

だが、三枝プロデューサーの再三にわたる懇望で、昭和四十三年の暮、出演は実現した。もちろん歌は「無情の夢」——しかも、ただ一曲だけだった。だが、昔の美声は少しも衰えていなかった。〔三枝・永来（1970：p.119）〕

四家文子、小林千代子、志村道夫、波平暁男、美ち奴、由利あけみ、高峰三枝子、小笠原美都子、奈良光枝、神楽坂はん子、初代コロムビア・ローズ、青葉笙子、日本橋きみ栄といった人物も、昭和40年代（1965～1974年）当時は流行歌の世界から引退していたが、「なつかしの歌声」で久しぶりに流行歌を歌い、中には現役復帰した者もいる。（65）

なお、波平暁男は戦時歌謡歌手として、当時、霧島昇につぐ人気があった。流行歌謡のヒット曲としては「月夜船」を出している（次項参照）。だが、どういう心境の変化からか、終戦とともに現役を退いて生国の沖縄にかえり、その地で歌謡学院をひらいて後進の養成にあたっていたが、最近ふたたびコロムビア芸能と専属の再契約を結んだ。東京12チャンネルの「なつかしの歌声」が琉球放送にもネットされ、その好評に刺戟されてか、出演したい意向を伝えてきている。〔三枝・永来（1971：p.59）〕

なお、高峰三枝子は、戦後、映画主題歌をいくつか吹きこんだが、その後、のどを痛めて、およそ十年の間レコードや放送から遠ざかっていた。東京12チャンネルで「歌謡百年」の開始にあたって、たまたま同局の別番組に出演中の彼女に、三枝プロデューサーが「歌ってみる意向はないか」ときいたところ、最初は固辞したが、再三の熱心なすすめで、ようやく歌う気になり、それから自分で納得のいくまで練習を重ね、やっとテレビ出演が実現した。

「あの機会が与えられなかったら、私は再び歌をうたうことはなかったでしょう」と彼女は述懐している。〔三枝・永来（1970：p.260）〕

東京12チャンネル「なつかしの歌声」では、この「十三夜」をオリジナルの形でブラウン管に再現しようと企画を立て、当時大阪に在住していた小笠原美都子をわざわざ東京のスタジオにまで呼びよせてうたってもらった。（第57回 昭和44・10・21放送）おそらく、これが小笠原美都子にとっても、戦後はじめての「十三夜」のテレビ放送であつたらうかと思われる。なお、当日は東海林太郎も出演していたので、「琵琶

「琵琶湖哀歌」も二人でいっしょにうたい、レコード吹込み当時の姿をそのまま復元放送できた。なお、この歌は、「なつかしの歌声」百回記念講演でも、サンケイ・ホールの舞台上で二人がうたって好評を博した。〔三枝・永来（1971：p.52）〕

デビューしてからわずか半年たらずのうちに神楽坂はん子の名は全国的に知れわたってしまった。（中略）だが、どうしたことか、二年半後（昭和三十年）、まだ人気が上昇中だというさなかに、ふいと引退してしまった。その後、レコード界に復帰したものの、歌はうたわず、クラウン・レコードの女ディレクターという風変りな地位だった。

ところが、世の中はおもしろいもので、偶然の一致とでもいおうか、東京 12 チャンネルが「なつかしの歌声」の放送を開始した昭和四十三年の四月、その同じ月に、はん子はそれまで住んでいた関口駒井町の家を引きはらって、ふたたび神楽坂の近くの、こじんまりした家に移ってきた。彼女自身の口から出た言葉を借りると「これまで十三年間の、おんなの歴史を燃してきました」そうだ。ま、それはさておき、その後、制作担当の三枝チーフ・プロデューサーの再三にわたる熱心な要請によって、彼女はふたたび“歌手”としてブラウン管にそのあで姿を見せることになった。それ以来、他の各局にも出演、流行歌や俗曲をうたって、現役歌手もおよばぬ人気を博している。最近では LP も二、三種吹込み、とても一たん引退した人とは思えないほどの活躍ぶりである。なんにしてもめでたいことだ。〔三枝・永来（1971：p.223）〕

当時現役中の歌手だけでなく、現役を離れていた歌手までも引っぱり込んだという所に、「なつかしの歌声」の成功と、昭和 40 年代（1965～1974 年）の「なつメロ」ブームの特徴があるだろう。(66) 要するに、既に人々から忘れ去られていた往年の歌手を、再び彼らの記憶から呼び起こすことに貢献したのである。

他にも「なつかしの歌声」では、オールド歌手にお馴染みの歌を歌ってもらうだけではなく、あまり人々に知られていないようなマニアックな歌を歌ってもらうたり、他の歌手の持ち歌を歌ってもらうという企画も行なった。『「なつかしの歌声」放送全記録』(67)によると、あまり知られていないようなマニアックな歌というのは、昭和 43（1968）年と昭和 44（1969）年を取りあげるだけでも、例えば 5 月 17 日放送の藤山一郎「英国東洋艦隊潰滅」であったり、6 月 14 日放送の伊藤久男「雲のふるさと」、霧島昇「今年の燕」、11 月 5 日放送の霧島昇「夜霧の波止場」、翌 44（1969）年の 2 月 18 日放送の田端義夫「母と兵隊」、4 月 8 日放送の東海林太郎「築地明石町」、4 月 15 日放送の林伊佐緒「女性の戦い」…とキリがない。他の歌手の持ち歌を歌ってもらうという企画に関しては、例えば昭和 44（1969）年 12 月 23 日放送の回では、今は亡き人のヒット曲を歌うという企画で、伊藤久男が松平晃と徳山璉の歌を、田端義夫が北廉太郎と上原敏の歌を、石井亀次郎が楠木繁夫と上原敏の歌を、近江俊郎が上原敏と松平晃の歌をそれぞれ歌っているし、昭和 45（1970）年 10

月 27 日放送の回では、市丸の持ち唄である「天竜下れば」と「濡れつばめ（お小夜恋慕の歌）」をそれぞれ榎本美佐江と神楽坂はん子が唄い、そのお返しに市丸が神楽坂はん子の持ち唄である「ゲイシャ・ワルツ」を唄い、最後にこれまた市丸の持ち唄である「旅は青空（青空恋し）」を 3 人で唄うという、持ち歌の交換が行なわれている。「戦前、戦中、戦後をそれぞれ代表する三人の日本調歌手が、お互いに持ち歌をとりかえてうたうという企画は『なつかしの歌声』ならでは」の、なかなかおいそれとは実現できない企画であった。〔三枝・永来（1971：p.255）〕以上の「なつかしの歌声」の企画からも、同番組が「なつかしの“メロディー”」ではなく「なつかしの“歌声”」なのであり、歌そのものを単独で取り出すのではなく、往年の歌手が歌を歌う姿にスポットを当てようとした姿勢が伝わってくる。

3-5 「なつかしの歌声」の全国展開

以上、昭和 40 年代（1965～1974 年）に「なつメロ」ブームが起こるきっかけとなったのは、東京 12 チャンネルの「なつかしの歌声」であった。だがここで、当時地方に系列局がなく、東京のローカルテレビ局に過ぎなかった東京 12 チャンネルの影響力が、果たしてどの程度のものであったのかと疑問視する声も出よう。このことに関して、以下に説明していこう。

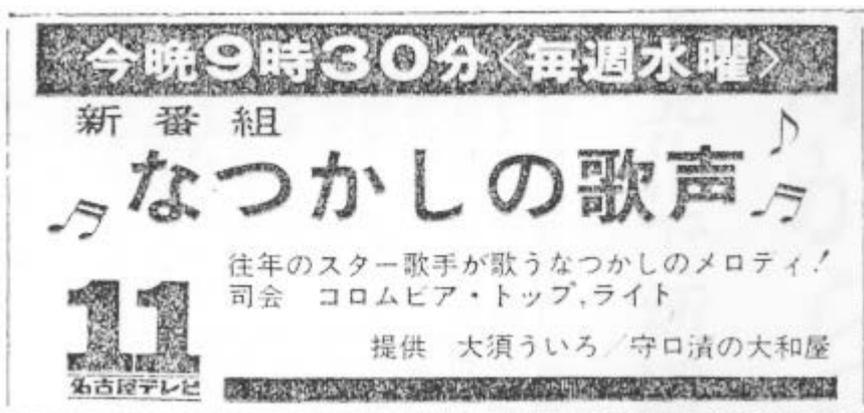
まず、「なつかしの歌声」は関東地方でしか放送されていなかったのではないかという疑問がある。これに関しては、三枝氏及び三枝氏の部下であった T 氏から話を伺うことが出来た。

当時既に同番組は、生中継ではなく、あらかじめ VTR で録画撮影してから放映していたので、地方の各テレビ局の要望で、同番組のフィルムを数日後～数ヶ月後に送り、番組販売していたとのことである。例えば、関西地方では毎日放送が、東海地方では名古屋テレビが、沖縄では琉球放送が番組を買い取り、テレビで放映していた。「なつかしの歌声」はこのように、ほぼ全国各地でテレビ放映されていたようである。(68) 三枝氏によると、この「なつかしの歌声」で初めて東京 12 チャンネルの番組を全国販売することが出来たことが、同社の全国展開につながったとのことである。地方での公開録画をしたのもこの番組が最初であり、特に、本土復帰間もない沖縄での公開録画は画期的なことであったとのことだ。(69) 要するに、東京 12 チャンネルの「なつかしの歌声」という番組には、全国各地のテレビ局が目をつけていたということになる。

東海地方の名古屋テレビでは、昭和 44（1969）年 1 月から毎週水曜日 21 時 30 分～22 時に放送している。その後同番組の放送時間帯が変わることはずっとなく、昭和 48（1973）年 3 月に関東地方でいったん「なつかしの歌声」が終了したのをきっかけに、東海地方でも放送枠が毎週金曜日 22 時 30 分～23 時に移り、翌年の昭和 49（1974）年 4 月に、関東地方より遅れること半月で最終回を迎えている。(70)

以下は、東海地方で初めて「なつかしの歌声」が放送された日の、東海地方の地方紙で

ある中日新聞の番組欄に載った広告である。縦 3 センチ強、横 7 センチ強の大きめの広告で、番組欄の目立つところに掲載されている。この日放送された回のサブタイトルは「思い出の窓辺に」であり、関



(『中日新聞』昭和 44 年 1 月 15 日朝刊, p.16 より)

東地方では昭和 43 (1968) 年 10 月 8 日放送分の、本放送開始 2 回目のものである。以降、東海地方では、関東地方より 3 ヶ月遅れで放送することになった。(71)

もちろん、地方の視聴者も「なつかしの歌声」をしっかりとチェックしていたようである。以下にビデオ・リサーチ社の中部支社で閲覧した名古屋地区の「なつかしの歌声」の 3 ヶ月ごとの視聴率の変遷をリストにする。

日時	視聴率及び平均視聴率 (%)
昭和 44 (1969) 年 1 月 15 日 (第 1 回)	21.5
昭和 44 (1969) 年 1~3 月	20.2
昭和 44 (1969) 年 4~6 月	19.1
昭和 44 (1969) 年 7~9 月	17.5
昭和 44 (1969) 年 10~12 月	16.4
昭和 45 (1970) 年 1~3 月	18.5
昭和 45 (1970) 年 4~6 月	12.0
昭和 45 (1970) 年 7~9 月	11.7
昭和 45 (1970) 年 10~12 月	13.7
昭和 46 (1971) 年 1~3 月	14.4
昭和 46 (1971) 年 4~6 月	14.6
昭和 46 (1971) 年 7~9 月	12.0
昭和 46 (1971) 年 10~12 月	14.6
昭和 47 (1972) 年 1~3 月	13.8
昭和 47 (1972) 年 4~6 月	12.2
昭和 47 (1972) 年 7~9 月	11.7

昭和 47 (1972) 年 10～12 月	16.8
昭和 48 (1973) 年 1～3 月	14.2
昭和 48 (1973) 年 4～6 月	7.2
昭和 48 (1973) 年 7～9 月	6.9
昭和 48 (1973) 年 10～12 月	6.3
昭和 49 (1974) 年 1～3 月	4.6
昭和 49 (1974) 年 4 月	2.5

次は、夏及び大晦日の特別枠での名古屋地区の視聴率である。

日時	視聴率 (%)
昭和 44 (1969) 年 12 月 31 日 25 : 05～	不明
昭和 45 (1970) 年 8 月 15 日 (土) 24 : 40～	不明
昭和 45 (1970) 年 12 月 31 日 25 : 00～	不明
昭和 46 (1971) 年 8 月 14 日 (土) 24 : 50～	3.4
昭和 46 (1971) 年 12 月 31 日 25 : 05～	5.5
昭和 47 (1972) 年 8 月 14 日 (月) 24 : 35～	2.6
昭和 47 (1972) 年 12 月 31 日 25 : 05～	7.8
昭和 48 (1973) 年 8 月 10 日 (金) 24 : 05～	1.7
昭和 48 (1973) 年 12 月 31 日 25 : 05～	4.9
昭和 49 (1974) 年 8 月 9 日 (金) 24 : 10～	2.9
昭和 49 (1974) 年 12 月 31 日 25 : 05～	4.5

まずは通常枠での視聴率の説明から入ろう。関東地区の視聴率と比較できると良かったのだが、東京のビデオリサーチ社本社まで出向く時間の余裕がなかったため、関東地区の視聴率データは入手できなかった。しかし、3-2で紹介した図4と比べてみても、決して名古屋地区の視聴率は引けを取らないということが分かるであろうし、他の音楽番組の視聴率と比較しても、全く引けを取らなかった。次に、通常枠の視聴率リストを見てみると、昭和 45 (1970) 年 4～6 月と、昭和 48 (1973) 年 4～6 月の 2 つの境界線で、視聴率がグッと下がっていることに気づくであろう。昭和 45 (1970) 年 4～6 月の境界線で視聴率が下がっている原因は特定できないが、この時期には、各局の他のテレビ番組、音楽番組も同様に視聴率が下がっているため、「なつかしの歌声」の相対的な視聴率が下がったわけではないということを指摘しておきたい。昭和 48 (1973) 年 4～6 月の境界線に関しては、前月の 3 月に関東地方でいったん「なつかしの歌声」が終了した時期に当たり、東海地方でも放送枠が毎週金曜日 22 時 30 分～23 時に移った時期に当たる。この時期の視聴率低下は、このことが影響していると考えられる。

次に、特別枠での視聴率の説明をしよう。以下の関東地区の視聴率 (72) と比較してみる

日時	視聴率 (%)
----	---------

昭和 43 (1968) 年 12 月 31 日	11.0
昭和 44 (1969) 年 12 月 31 日	10.9
昭和 45 (1970) 年 8 月 4 日 (火)	20.4
昭和 45 (1970) 年 12 月 31 日	12.8
昭和 46 (1971) 年 8 月 8 日 (日)	16.5
昭和 46 (1971) 年 12 月 31 日	8.7
昭和 47 (1972) 年 8 月 13 日 (日)	16.0
昭和 47 (1972) 年 12 月 31 日	8.1
昭和 48 (1973) 年 7 月 15 日 (日)	11.3
昭和 48 (1973) 年 12 月 31 日	6.4
昭和 49 (1974) 年 7 月 7 日 (日)	10.9
昭和 49 (1974) 年 12 月 31 日	11.1

と、名古屋地区は関東地区よりも軒並み低くなっている。これは、名古屋地区では関東地区のように生中継ではなく、録画したものを深夜の 24 時台～25 時台という時間帯にスタートしていることが原因であると思われる。

以上のように、「なつかしの歌声」は、通常枠のものに関しては、関東地区同様に名古屋地区でも視聴されていたということが分かった。(73) このことから、東京 12 チャンネルの「なつかしの歌声」の影響力は全国に浸透しており、同番組が地方でも「なつメロ」ブームを築き上げていたということが言えるであろう。

3-6 他のメディアへの相乗効果

東京 12 チャンネル「なつかしの歌声」は、他のメディアにも相乗効果を及ぼしたと言える。まず、テレビ・ラジオ番組で、類似の「なつメロ」番組が登場した。

ラジオ関東「この歌あの人」は、京都シンポ工業がスポンサーで、昭和 43 (1968) 年 11 月から昭和 47 (1972) 年 3 月まで放送されていたラジオ番組である。関東地方では、昭和 43 (1968) 年 11 月から昭和 46 (1971) 年 7 月までは毎週日曜日 17 時～17 時 30 分に放送していったん放送を終了した後、同年の 10 月から翌年の 3 月までは、毎週日曜日 17 時 30 分～18 時に放送した。放送局は、ラジオ関東の他、近畿放送、中部日本放送、RKB 毎日放送である。この番組の司会をしていたのは、宇井昇という、民間放送第一号のアナウンサーであった。(74) 宇井昇自身が「なつメロ愛好会」の会報でこの番組の紹介をしているので、以下に引用しよう。

終戦、カストリやドブロクをやっているうちにアナウンサーになって、名古屋の中部日本放送昭和二十六年九月一日、民間放送が開始。私の声が日本の民放の第一声で。

昭和三十四年、フリーになってまた東京。一昨年十一月、京都シンポ工業がスポンサーで、なつメロ「この歌、あの人」スタート物故歌手は関係者、現在歌手はご本

人の話を聴きながら、レコードは原則としてオリジナルのSP。作詞、作曲の先生方にもスポットライトをあててということで、中山晋平作曲の「ゴンドラの唄」をテーマ音楽に、上原敏特集を第一回として、デイックミネ、渡辺はま子、灰田勝彦、東海林太郎、霧島昇。淡谷のり子、二葉あき子、田端義夫、榎本健一、小畑実、勝太郎、藤山一郎、伊藤久男、岡本敦郎、高峰三枝子、岡晴夫、作曲家の故阿部武雄、故中山晋平、菅原都々子、近江俊郎、故松平晃、故楠^マ繁夫、作詩の藤田まさと、音丸、作詩の島田馨也。

レコード大賞特別賞の佐伯孝夫紫綬褒賞の時雨音羽、服部良一、古関裕而 …特集と綴って六十数週間。

私は、思いがけない多くの方々から心温まる便りをいただいて感激。反面、オリジナルのSPをさがすのが大変で。名古屋の森一也さんのお世話になったり、大阪の井上さんからハッパをかけられたり、近く宇都宮の福田さんをおたずねするつもりで。

「この歌、あの人」は目下、ラジオ関東、中部日本放送、近畿放送 RKB 毎日放送と四局ネットで流れています。なつメロフアンの皆様の御指導、御叱正をお願いしたい、なつメロを聴くのは、私にとっては親父と対話しているみたいなもので。

親父が死んでからもう三十年になる。(宇井昇「この歌 あの人」, 「なつメロ愛好会」会報第6号, 昭和45(1970)年, p.1)

なつメロをオリジナルの原盤で聴き、織りなす人間模様を正確に伝えようという企画で「この歌あの人」がシンポ工業の提供で、ラジオ関東をキー・ステーションに中部日本放送、近畿放送、RKB 毎日放送の四局ネットでスタートしたのは昭和四十三年十一月でした。

第一集の「上原敏特集」から最終回、第一七七集の「島田馨也特集」までの三年半。今、最終回の放送を終えて、私は虚脱状態です。永いようでもあり短いようでもあつ

たあの日この時の感激がアリアリと走馬灯のよ^マによみがえります。(宇井昇「この歌あの人」始末記, 「なつメロ愛好会」会報第19号, 昭和47(1972)年, p.6)

宇井が述べているように、この番組では、毎週1人ずつ往年の歌手及び作詩・作曲家を選んだ上で、既に亡くなっている場合は関係者に、生存中の歌手には本人に出演してもらい、当時の思い出話を語ってもらいながら、オリジナル音源のレコードを流して歌を聞いてもらうという番組であった。(75) この番組でも「なつかしの歌声」同様、取り上げる歌手の中にはマニアックな人物も含まれており、例えば藤原義江、三島一声、美ち奴、杉狂児、青葉笙子、如月俊夫らが出演している。聴取者の反応として、以下を引用しよう。

去る三月一日の午後五時より、ラジオ関東「あの^{ママ}人この歌」を拝聴致しました。相変わらずの声で面白おかしく話をする青葉さんに大変親しみを感じました。仙台弁の「ヨカンベ」までとびだし、かざり気のない性格に人の好きを表わしていました。まだまだ未練があるかの様「私って早トチリだから止めちゃったけれど、歌っていれば良かったわ!」という言葉は、いまのお上品振った歌手に聴かせたい文句です。上原（敏）さん、北（廉太郎）さんのお話も良かった。宇井さんがここでまた一くさり、“伊豆の故郷”や“夢のゆりかご”など北さんの話を一席。放送の中で、“戦場撫子”素晴らしい曲でした。（氏原幸夫「なつかしい青葉さん」,「なつメロ愛好会」会報第6号,昭和45（1970）年, p.6、括弧内は引用者による）

ラジオ関東（全国ネット）の評判番組“この^{ママ}唄あの人”が七月終了しました。本会の会員でもある宇井昇さんの司会で**昔のSPを楽しめる唯一の放送番組**でしたのに残念でなりません。是非再登場の一日も早からんことに協力していただけませんか。あの番組の聴取者の意見欄で寄せられた、手紙を聞く度に、まだまだたくさんの方のなつメロ愛好家の方が全国に多いことに驚き且、泣かされました。スポンサーのシンポ工業さん御苦勞様でした。ご苦勞ついでに次のなつメロ企画もお願いします……と。（氏原幸夫「共鳴していただけますか?」,「なつメロ愛好会」会報第15号,昭和46（1971）年, p.2、太字は引用者による）

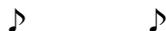
三年数ヶ月もの長い間、多くのなつメロファンに熱狂的な支持を受け、一週一度のこの時間が、生活のカレンダーであり、生きる支えであるとまで慕われていたラジオ関東の「この歌・あの人」が惜しまれながら三月一ぱいで終るといふ。

この番組の魔力を、なかには、オリジナル原盤で当時のレコードが聴けるといふ点にのみピントを合わせる者もいたであろう。然しその大半は、なつメロに対する深い造詣と、もって生れた豊かな人格とをバックボーンとして、常にユニークな“語り”を展開してこられた宇井さんに絞って憚かるまい。（浜田正也『『この歌・あの人』放送終了記念“宇井昇さんに感謝の集い”に参加して』,「なつメロ愛好会」会報第19号,昭和47（1972）年, p.7）

昭和40年代（1965～1974年）当時、テレビの普及と共に中高年層のラジオ離れが進行しており、特に深夜番組は10代の若者向けの場になっていたが、ラジオ関東の「この歌あの人」は、これら中高年層にアピールするための番組として機能したのであろう。（76）

テレビ番組では、大阪の読売テレビ制作の「帰ってきた歌謡曲」が、「第二のなつメロ番組」として有名である。当時の朝日新聞に番組の紹介記事が載っている。

‘なつメロ’ 番組



第一回は軍歌と戦時歌謡特集

最近全盛の“なつメロ”の良さを若い人たちに紹介する番組で、第一回の今夜は、軍歌と戦時歌謡特集。まず昨年暮れの衆議院選挙をきっかけに、タレント業をやめた南道郎が登場、軍歌に盛られた人間性を強調、東海林太郎、霧島昇がそれぞれ「あゝ草枕幾度ぞ」「月月火水木金金」を歌ったあと、和田アキ子がブルース調で「戦友」を歌う。

その他「麦と兵隊」「若鷺の歌」「同期の桜」など。『朝日新聞』昭和45（1970）年4月2日朝刊，p.17)

この番組は昭和45（1970）年4月から昭和49（1974）年3月まで、関東地方でも東海地方でも一貫してずっと毎週木曜日22時30分～22時55分に放送している。上記引用には「“なつメロ”の良さを若い人たちに紹介する番組」とあるが、対象視聴者層は「なつかしの歌声」と同じであると考えてよいであろう。この番組も、「なつかしの歌声」同様に往年の歌手をスタジオに呼び、歌を歌ってもらうものであったと見られる。制作は関西の読売テレビであるが、関東地方では日本テレビが、東海地方では中京テレビが放送しており、こちらも全国に放送されていたのであろう。この番組についても、ビデオリサーチ社名古屋支社で名古屋地区の視聴率データを閲覧することが出来たので、以下にリストとして掲載しよう。

日時	平均視聴率 (%)
昭和45（1970）年4～6月	不明
昭和45（1970）年7～9月	不明
昭和45（1970）年10～12月	不明
昭和46（1971）年1～3月	2.7
昭和46（1971）年4～6月	2.7
昭和46（1971）年7～9月	2.8
昭和46（1971）年10～12月	3.8
昭和47（1972）年1～3月	4.4
昭和47（1972）年4～6月	4.4
昭和47（1972）年7～9月	5.2
昭和47（1972）年10～12月	4.5
昭和48（1973）年1～3月	3.9
昭和48（1973）年4～6月	4.4

昭和 48 (1973) 年 7～9 月	5.5
昭和 48 (1973) 年 10～12 月	6.4
昭和 49 (1974) 年 1～3 月	5.6

以上のように、特に深夜遅くに放送しているというわけでもないのに、「なつかしの歌声」と比べると著しく視聴率が低いということが分かる。これに関しては、昭和 40 年代 (1965～1974 年) 当時、中京テレビの番組自体が他のテレビ局と比べて極端に平均視聴率が低かったということが原因となっているであろう。中京テレビは昭和 44 (1969) 年 4 月に UHF テレビ局としてテレビ放送を開始しているが、当時主流であった VHF テレビ局ではなかったため、中京テレビを受信できない家庭が相当数存在していたのではないかと推測する。(77) 関西地方や関東地方ではもっと視聴率が高かったのではないだろうか。

東京 12 チャンネルでは、「なつかしの歌声」の他に「あゝ戦友あゝ軍歌」という番組が昭和 44 (1969) 年 8 月にスタートしている。これは、同年の 9 月までは毎週日曜日 22 時 30 分～23 時に放送し、翌 10 月から昭和 46 (1971) 年 3 月までは毎週土曜日 22 時～22 時 30 分に放送し、終了している。これは、「軍隊生活を体験した芸能人たちをゲストに迎えて軍隊生活の思い出話、戦友との対面、軍歌などを披露する」(78) という番組であり、純粹な歌番組ではなかったが、世間からは「なつメロ」番組として認識されていたようである。

“ナツメロ” がテレビ、レコード界でブームを呼んでいるが、なかでも「なつかしの歌声」を放送している東京 12 チャンネルでは、八月三日スタートの新番組として、またまた「あゝ戦友あゝ軍歌」と題する歌謡バラエティーを放送する。

この番組は、戦前戦中の軍歌を中心に構成し、登場するゲストの思い出深いご対面を折り込んだもの。ナツメロファンや戦争体験者なら必見の番組というところ。放送曜日も日曜日夜十時三十分からというのも泣かせるところ。

“ナツメロ” 番組では「歌謡百年」「なつかしの歌声」など長年の実力を持つ東京 12 チャンネルだけに出演する往年の大歌手も、東海林太郎、藤山一郎、灰田勝彦、霧島昇、勝太郎、市丸、渡辺はま子、並木路子など。このほか現役では、水前寺清子、水原弘、渥美清、アイ・ジョージ、コロ・ラティーノ、二期会、ローヤル・ナイツなども出演する。

第一回の放送 (八月三日) でのゲストは東映スターの鶴田浩二。鶴田は、かつて海軍航空隊員であった。当時の思い出話、戦友とのご対面などを披露するほか、出演歌手と共に大いに軍歌を歌いまくるというもの。司会は木島則夫が担当する。「戦前派ばかりでなく、戦後派にも感動を持って見てもらえるように制作します」というのは局側の話。そんな配慮が人気スター鶴田浩二のゲスト出演にも現われているといえよう。

(『あゝ戦友あゝ軍歌』◆軍歌と思い出でつづる新番組◆, 『週刊 TV ガイド』昭和 44 (1969) 年 8 月 8 日号, p.136)

もっとも、司会者の木島則夫は、「戦果を語ったり、単なる懐古趣味に流れるのではなく、軍歌に明け暮れたボクらの青春をもう一度、フランクに見直そう」(79) というのがこの番組の目的であると述べているし、反戦の思いから戦争をふり返ることがこの番組の主要内容であるから、この番組はむしろ「私の昭和史」や「人に歴史あり」のような“昔語りの番組”に近いであろう。(80)「なつメロ」として軍歌も歌われる番組であったと捉えるのが良いであろう。

NHK では昭和 41 (1966) 年 3 月にテレビ番組の「黄金のいす」が終了して以来、これといった「なつメロ」番組は登場していなかったが、昭和 44 (1969) 年から毎年夏に、「夏の紅白」と銘打って「なつメロ」の特別歌番組である「思い出のメロディー」を放送しており、現在まで続いている。昭和 47 (1972) 年 7 月 15 日号の『グラフ NHK』には、「<思い出のメロディー>は、四年前の昭和四十三年の元旦に、明治百年を記念して<百年の歌声>を放送したのがそのはじまり。当時、予想をはるかに上回る人気で、放送終了後『ぜひ来年も』という電話が殺到、同じ希望の手紙も翌日わんさと舞い込んだ。そして翌四十四年の夏から、<思い出のメロディー>と題して登場、以来、“暮れの<紅白>に対する”夏の<紅白>といわれ、大ぜいのファンに親しまれてきた」との記述が出ている。(81) これに対して、渡辺秀彦氏の話によると、「思い出のメロディー」の原型となったのは、昭和 28 (1953) 年 3 月 22 日にラジオ第一放送で放送した「歌の展覧会」という番組であるとのことであった。(82) しかしながら、いずれにせよ、「思い出のメロディー」の原型となった番組が存在しているという事実は、世間には広く知られていなかった。「思い出のメロディー」の第 1 回の放送が昭和 44 (1969) 年という、東京 12 チャンネルの「なつかしの歌声」の放送がスタートした翌年というタイミングであったために、世間からは東京 12 チャンネルの二番煎じであると酷評された。

NHK の“夏の紅白”は二番煎じ！！

なつ・メロ・ブームの火付け役はなんといっても東京 12 チャンネルの「なつかしの歌声」。(中略) 東京 12 チャンネルが開拓したこの分野に昨年は NHK もくり出してきた。いわゆる“夏の紅白”である。

「NHK のこういうやり方は、しかし評判よくなかったね。いいところだけいただくという剽説根性だからね。東京 12 チャンネルの百回記念と真っ正面からぶつかるわけですよ。いわば果たし状」(東京 12 チャンネル・三枝孝栄プロデューサー)

なつ・メロ歌手の間にも、こういう NHK のやり方を面白く思わない気骨のある人もかなりいて、NHK は、員数を揃えるのに四苦八苦している。ディック・ミネなんぞは、NHK のたつての出演依頼を蹴って、昨年は家族とホンコンへ遊びにいった。

「NHK ともあろうものが、人の上前をはねるようなまねをして、やることがきたない」

三拝九拝して、ようやく引っ張り出しているのが NHK。そういう情勢に対する懐柔策として、このところ NHK「歌の祭典」（日曜日）では、淡谷のり子、伊藤久男など大御所を呼んで出演させていた。

それにひきかえ、得意なのは、いまやなつ・メロの牙城の東京 12 チャンネル。恩を売った上に番組の評判も上々。すっかりウケに入っているのである。（「超ワイド特集生きていた思い出の歌謡曲——第 1 部 爆発したなつ・メロブームの稼ぎ頭は？」、『週刊 TV ガイド』昭和 45（1970）年 8 月 7 日号， pp.29-30）

経緯は不明であるが、実際、昭和 44（1969）年の第 1 回の放送には、東海林太郎、ディック・ミネ、伊藤久男、近江俊郎、田端義夫、林伊佐緒といった人物が、昭和 45（1970）年の第 2 回の放送には、ディック・ミネが出演していない。⁽⁸³⁾ しかしながら、「思い出のメロディー」は、時の「なつメロ」ブームに乗る形で、毎年高視聴率を稼いだ。⁽⁸⁴⁾ ビデオリサーチ社中部支社で閲覧した名古屋地区の視聴率の変遷は以下の通りである。なお、東海地方でも、関東地方と同一日時で中継されている。

日時	視聴率 (%)
昭和 44（1969）年 8 月 2 日	31.6
昭和 45（1970）年 8 月 8 日	31.0
昭和 46（1971）年	不明
昭和 47（1972）年	35.6
昭和 48（1973）年	25.4
昭和 49（1974）年	31.1
昭和 50（1975）年	29.2

昭和 44（1969）年と昭和 45（1970）年の「思い出のメロディー」では、明治・大正・昭和の 3 代にわたる思い出の歌、なつかしのメロディーを集めた特集となっており、明治時代と大正時代も範囲に入れているという点で、NHK ラジオ「なつかしのメロディー」や昭和 43（1968）年元日放送の「百年の歌声」からの連続性が感じ取れる。出演は、戦前デビューの往年の歌手の他、荒井恵子、三橋美智也、フランク永井、都はるみ、北島三郎、森進一、坂本九、森山良子など、若手～中堅の歌手も出演している所が、「なつかしの歌声」とは差異を感じさせる。昭和 46（1971）年の第 3 回からは、明治・大正時代は省略し、昭和期以降のものを放送するようになる。

出演する歌手の中には、葦原邦子（第 2 回）、杉狂児（第 2 回）、田谷力三（第 2 回）、美ち奴（第 2 回・第 7 回）、三木鶏郎（第 5 回）、羽衣歌子（第 7 回）のように、珍しい顔ぶれが並ぶ所も、「なつかしの歌声」や「この歌あの人」などと共通する点である。

以上、「なつかしの歌声」以降、「なつメロ」ブームの中で派生したテレビ・ラジオの主な「なつメロ」番組を見てきたが、「なつかしの歌声」も含めて共通している点は、歌単体を取り出してくるのではなく、オリジナルのレコードを吹き込んだ往年の歌手にスポット

を当てて再評価していこうという流れが存在するという点にある。(85)

次に、レコードに関しては、前章でも書いたように、昭和 30 年代 (1955~1964 年) から「なつメロ」ものは存在しているが、昭和 40 年代 (1965~1974 年) に入って「なつメロ」ブームが始まると、新たにステレオ録音で、もしくは SP 音源の復刻という形で、往年のオリジナル歌手が吹き込んだものが多くなって来る。この点に関して、新聞記事からも確認しておこう。

最近のレコード界で“なつかしのメロディー”が盛んだ。往年の歌手たちが人気を集めた歌を再録したレコードがしきりに発売され、着実な売れ行きだ。

なつメロものは、かつての映画スター高峰三枝子のリバイバル曲集「高峰三枝子歌のアルバム一、二集」をはじめ(中略)霧島昇(中略)伊藤久男(中略)岡本敦郎(以上コロムビア)(中略)小畑実(中略)東海林太郎(中略)灰田勝彦(中略)(以上ビクター)、(中略)東海林太郎(中略)岡晴夫(中略)をはじめとする津村謙、小畑実、大津美子、林伊佐緒、松島詩子などの“歌のアルバム”シリーズ(以上キング)。それに(中略)ディック・ミネ(中略)菊池章子(中略)菅原都々子(中略)などと目白押しの状態だ。

ほかに伊藤久男、東海林太郎、二葉あき子らの歌をシングル盤で発売する“ペル・エポック・シリーズ”(コロムビア)や、いろんな歌手を集めた「歌は流れる」(テイチク)なども出ている。

軍歌のたぐいは、戦後タブーの状態だった。が、三十六、七年ごろ(中略)(以上キング)や(中略)(以上テイチク)などが発売された。

これらは演奏ものよりボーカルものに反響が強かったというが、ここ一、二年は各社ベテラン歌手からグループ・サウンズまで登場させている。

売れ行きのほどは「いつも在庫は数十枚。それがいつの間にか売れる。地味だが安定している」(銀座の楽器店の話)そうだ。内容的には「戦友」「麦と兵隊」など哀調を帯びたもの、「ラバウル小唄」「ズンドコ節」など軽快なものが喜ばれているが、今の歌謡曲は若向きばかり。軍歌は青春時代がなつかしい、歌いやすいなどの点で迎えられるようだ。

歌う方では、森茂久弥(中略)(コロムビア)渥美清(中略)(ポリドール)水前寺清子(中略)(以上クラウン)など。(中略)演奏ものでは(後略)「なつメロ・レコード 軍歌に脚光 歌いやすさと思い出と」、『朝日新聞』昭和 44 (1969) 年 2 月 20 日夕刊, p.9)

一方のレコード各社。終戦後流行した歌の企画は、これまでもかなり出ていて、さらに昭和十年代から初期の方へとさかのぼる傾向がある。

このほど出たのでは「名盤・珍盤・秘蔵盤」第一巻(ビクター、四枚組)がある。

昭和三年から十四年までに親しまれた流行歌（はやり歌）、歌曲、民謡、寄席ものなどを収めた。（中略）

大型ものでは“オリジナル原盤による”とうたった「流行歌と共に 40 年」（テイチク）がある。「戦前・戦中編」「戦後編」の二巻にわかれ、それぞれ五枚組という大がかりなもの。（中略）

同じ大型盤では「心に生きる懐かしの歌ごえ」（ポリドール、十枚組）が出ている。（中略）

ほかに個々の歌手に焦点を当てた LP も多数ある。（中略）

キングも同様に“オリジナル原盤による”とうたって、童謡から戦時歌謡などまで出している。（「夏は“なつメロ”の季節——テレビ番組・レコードで企画ずらり」、『朝日新聞』昭和 48（1973）年 8 月 3 日夕刊，p.9）

レコード各社が相次いで「なつメロ」ものの企画を出していたということが分かる。昭和 40 年代（1965～1974 年）の「なつメロ」ブーム時においても、若手～中堅歌手に歌わせたものや演奏ものも依然として出回って売れていたが、往年の歌手によるものの需要も出てきたということが伺えよう。

3-7 往年の歌手の再評価・権威づけ

では、実際に「なつメロ」ブームにより、往年の歌手はどのように再評価・権威づけをされていったのであろうか。まず、東海林太郎という一歌手にスポットを当てることから始めよう。

3-7-1 東海林太郎の例

満州鉄道の職員であった東海林太郎は、昭和 8（1933）年に 34 歳で歌手に転身した。昭和 9（1934）年に「赤城の子守唄」で大ヒットすると、「国境の町」、「旅笠道中」、「野崎小唄」、「麦と兵隊」、「琵琶湖哀歌」と、次々と戦前期にかけてヒットを飛ばした。このように戦前はヒットに恵まれ、流行歌の第一線で活躍していた東海林であったが、戦後になると、決定的なヒットに恵まれずにレコード会社を転々とする日々が続いた。私生活でも、昭和 23（1948）年、30（1955）年、39（1964）年にそれぞれ直腸ガンの手術を行い、昭和 28（1953）年には最愛の妻シズを亡くすなど、苦難の日々であった。昭和 32（1957）年には歌手生活 25 周年ということで、記念レコードが制作され、華々しく記念公演も催されたが、同年の別の雑誌記事では、小畑実、笠置シズ子と共に、「人気に背かれた三歌手」として紹介されている。

ロイド眼鏡、向って右側の髪の毛をパーマで縮らせたスタイル、そして「赤城の子守唄」——。三十すぎた人には一目でわかる東海林太郎（マーキュリー）も、いまの

二十代にはピンとこない。

来る七月三十日から三日間、浅草国際劇場で「東海林太郎歌謡生活二十五周年記念講演」が開かれるそうだが、これは“夢よもういちど”…のデモンストレーションなのかもしれない。（「人気に背かれた三歌手——忘れかねた全盛時代」、『週刊東京』昭和 32（1957）年 6 月 1 日号，p.60）

東海林太郎が再び世間から注目されたのは、昭和 40（1965）年 11 月に、流行歌手として初の褒章である紫綬褒章を受章したことがきっかけであった。当時週刊誌では、「郷愁の歌手」に訪れた勲章の日——ガンと闘いながら歌一筋に生きる東海林太郎の情熱（86）、「勲章を胸の流行歌手 東海林太郎——三十三年の歌手生活に命を賭けてきた執念」（87）などと、特集が組まれている。東海林は褒章を受章したことで、この年の 6 月に「売れる、売れないではなく、歌謡界の文化財をたたえる意味で」（88）発売された LP 盤「歌ひとすじ三十五年・東海林太郎傑作集」が、当時の LP 盤の売り上げとしては最高となる 20 万枚のヒットとなり、これが 12 月に第 7 回日本レコード大賞特別賞を受賞した。この年の NHK「紅白歌合戦」にも、9 年ぶりに復帰出演を果している。

このように、東海林太郎は東京 12 チャンネルとは別の所から再評価を得るようになったのであるが、もちろん彼も「歌謡百年」や「なつかしの歌声」には何回も出演して歌を歌っている。「なつかしの歌声」では、東海林は番組を代表する歌手として認識されていたようだ。『週刊 TV ガイド』では、夏と大晦日の特別番組を放送する際の宣伝写真には、他の歌手と比べても、東海林の写真がひときわ大きく載っている。「なつかしの歌声」で東海林太郎がマイクの前で不動の姿勢で歌う姿勢は、「歌を愛し、歌の心と深さを追い求める求道者の姿」（89）として世間から権威的な評価を受けていた。東海林太郎が「なつメロ」ブームの中で権威づけされた様子が伝わる記事を以下に引用しよう。

りっぱなことのついでに、もったりっぱなことを東海林について書いて置こう。現代の歌手に対する、よい指針にもなると思う。

東海林は、歌詞をもらうと「ありがとうございます」といただいて、それを持って帰り、机の前にすわって、じっと歌詞を研究するのである。

彼は日本語の間違い、文法の間違いなんか、辛抱できなかったのである。その上で詩の内容を味わい、そこから出て来るイメージをつかみ取るまで読むのである。わからない所が一文字でもあれば、それをきびしくききただして来る。曲の場合でも同様であった。作詩、作曲家が最も恐れた歌手だった。（中略）

私は東海林の歌は作ったことがないが、藤山一郎の場合も同様であった。丁寧な口調だが、しっかりした質問をして来た。時には、どきんとすることを問われたこともある。これが本当の姿であると思う。

東海林は吹き込みのスタジオで、練習の間は夏など上着をぬぎネクタイをゆるめて

音楽合わせをするが、それができ上がっていざ本番となると、まずその前に顔を洗い、ネクタイをしめ直し、きちんと上着を着て出直して来る。「お願いします」とバンドに敬礼をして、マイクの前に例の「気をつけ」の姿勢をとるのであった。この時はもう、詩も曲もすっかり覚えていて「自分の物」にし切っていた。

これがそのまま、彼の歌謡に対する姿勢であったというべきだろう。また闘病二十年、直腸ガン手術四回という奇跡的なことも、この人生姿勢が可能にしたといえるのである。(藤浦洸「レコード太平記 28——東海林太郎②」、『読売新聞』昭和 45 年 3 月 30 日夕刊, p.9)

彼は歌に対しては実にきびしく真剣だった。彼と私の家とはその当時草原をへだてて五、六十ほど離れていた。毎朝早くから彼の発声練習の大きな声が私の寝室をおそった。彼は吹込みのたびに自分が納得するまで何回でも練習を私に強要した。しまいには、私のほうで面倒くさくなったり悲鳴をあげることもあった。

歌に対して、こんなにまで情熱と真剣さのある歌手が今の時代に果して何人いるだろう。直立不動の歌い方は彼のトレードマークのように思われていたが、これは決してわざと作った姿勢ではなく、彼が最初に私の「河原月夜」を吹込みした時からであり、さらにさかのぼってはレコード会社のテストを受けていたころからの姿勢であった。ステージにおけるゼスチュアなどは彼には問題ではなかった。

ただ真剣に歌うということだけが彼の生きがいであり人生だった。歌をゴマ化し、大衆にこびるようなゼスチュアなどは彼のもっとも軽べつすることであって、やる気もなければ、また、やれる器用さも彼は持っていなかった。いわば歌以外には彼ほどブリキッショな歌手も珍しかったといえるだろう。(中略)

歌ひとすじに生きぬく決心をさせ、一生涯を悔いのないものとして全うした大きな原因はこの「悟り」にあったものと私は思う。(田村しげる『『歌曲も流行歌も同じ』故東海林太郎、信念の一生』、『朝日新聞』昭和 47 (1972) 年 10 月 6 日夕刊, p.9)

このように、東海林太郎は「現代の」歌手との比較の中で美化され、その人生と生き方が「なつメロ」ブームの中で権威づけされていった。

昭和 47 (1972) 年に東海林が亡くなった際には、新聞や雑誌で大々的に報道され、「一つの時代が終わった」(90) という印象を人々に与えた。

テレビの登場で、歌謡曲の寿命が縮まり、うたかたのように消えていく歌手の多いなかで、「歌の道」四十年の東海林太郎さんの死は、この歌手がどのように、長くひとびとの胸を揺さぶり続けたか、を改めて思い起させた。(中略) 東海林さんの危篤状態が続いているとき、ここで東京 12 チャンネルのテレビ番組「なつかしの歌声」のビデオ取りがおこなわれていた。(中略)

「こんなことをいっちゃ、ここにいるみなさん方に悪いけど、やはり先生が欠けたんじゃ、このなつメロ番組もグッと印象が薄まってしまふな」といったのは司会のコロムビア・トップ。(中略)

淡谷のり子さんが舞台から戻ってきた。「何べん、何百べんも同じ歌をきちんと歌う。そんな歌い手の時代は、これで終わったのね。真剣な歌の時代は……」(「歌謡曲 大衆の心に生きる道——東海林太郎さんの死」、『朝日新聞』昭和 47 (1972) 年 10 月 5 日朝刊, p.22)

戦後に一度は忘れ去られた東海林太郎が、昭和 40 年代 (1965~1974 年) に入って再び世間からの注目を集め、再評価・権威づけされていった姿は、まさに「なつメロ」ブームを象徴するものだったと言えるだろう。

3-7-2 往年の歌手全般の様子

次に、「なつメロ」ブームの恩恵に預かった往年の歌手たち全般の当時の様子を概観しよう。

なつ・メロ歌手の一番の稼ぎ場所はキャバレー、クラブのステージ。名の通ったなつ・メロ歌手ならほとんどが月に二十日以上も歌っている。田端義夫、淡谷のり子、榎本美佐江などといったところのクラスは「月に四十五日も働いています」ということになる。ということは、昼はテレビ出演、午後から慰安会、夜はキャバレーというぐあいに一日に二カ所も三カ所も回る。

キャバレー、クラブでの出演料が、一晚ツウ・ステージで八万円から十万円が相場。少なく見積っても、月の収入は二、三百万円になる。

なつ・メロ歌手といえば、世間では“定年退職歌手”ぐらいに思われがちだが、どうしてどうして、キャバレー、慰安会では現役歌手以上にもてはやされているのである。(中略)

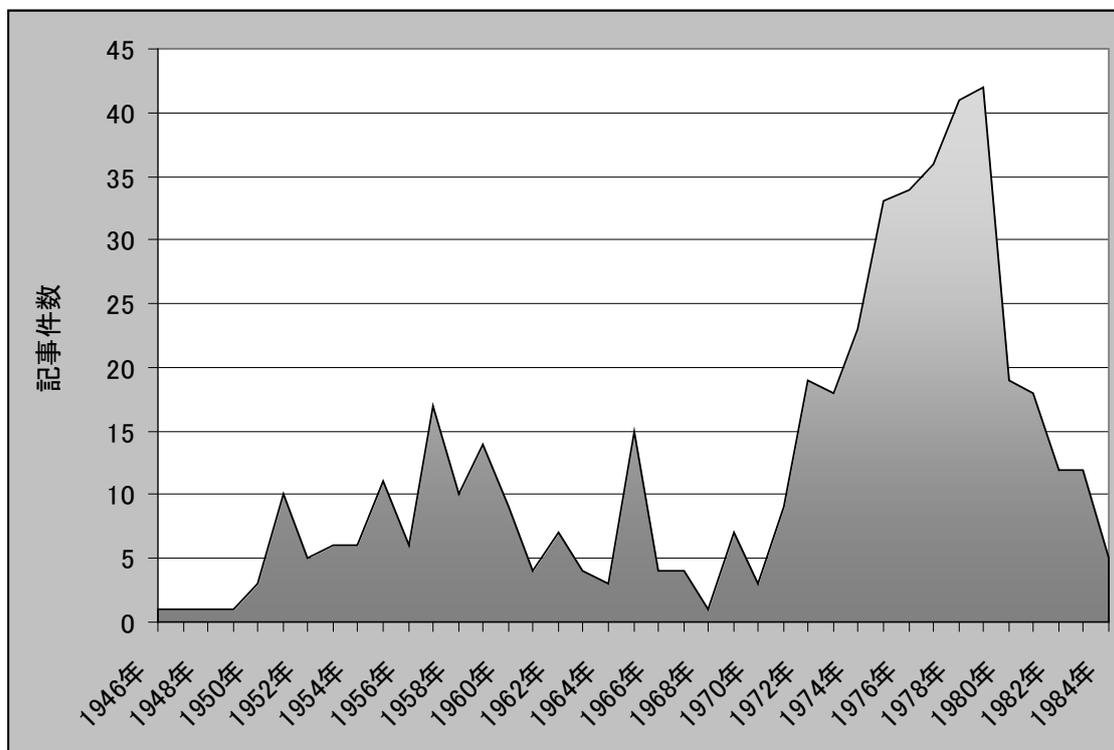
「このごろは“なつ・メロ・ブーム”というんで、お客さんも歌手をよく知っている。売れっ子歌手を百万、二百万出して呼ぶよりは十万円ぐらいで“なつかしのメロディー”を聞いてもらう方が、安くて、しかも喜ばれるんです」

キャバレー、クラブにすれば、安い買い物もので、しかもネームバリューは格別、なつ・メロ・ブームの余波はこんなところもうるおしているのである。(「超ワイド特集 生きていた思い出の歌謡曲——第 1 部 爆発したなつ・メロブームの稼ぎ頭は?」、『週刊 TV ガイド』昭和 45 (1970) 年 8 月 7 日号, p.29)

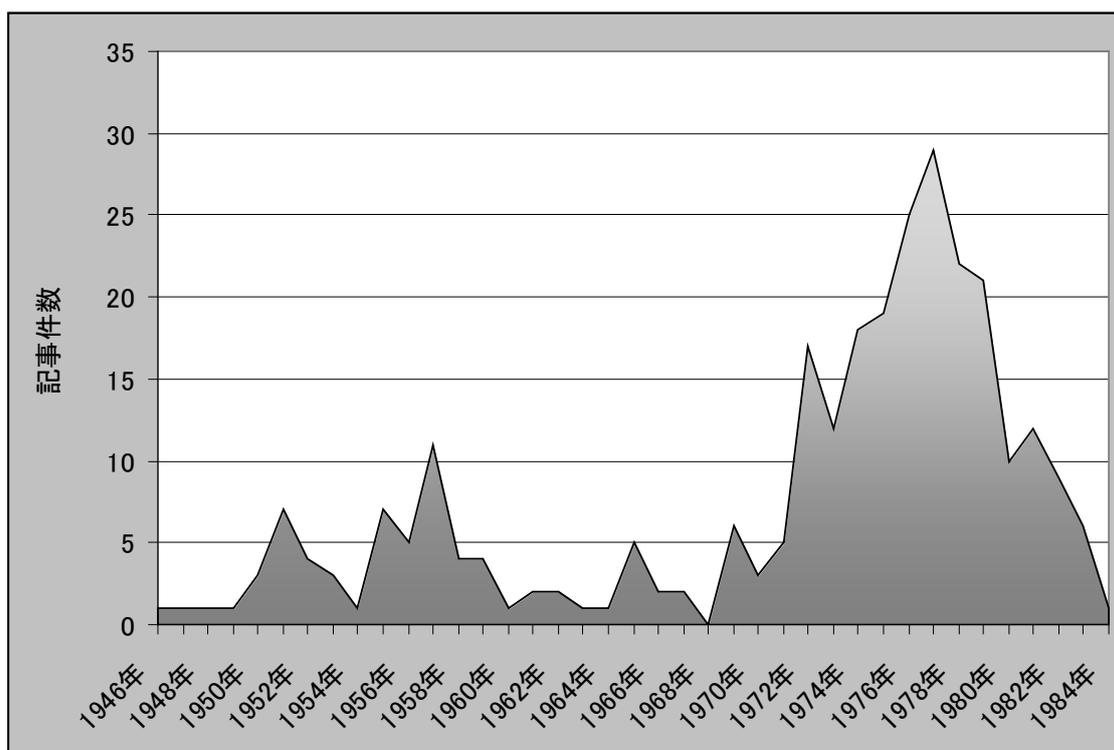
第一線を退いた往年の歌手がキャバレーやクラブなどに地方巡業するのは、「なつメロ」ブームが始まる以前からのことであるが、「なつメロ」ブームにより、その需要が高まった

様子が伺える。

次に、大宅壮一文庫にデータベース化されている、戦前デビューの歌手（東海林太郎、岡晴夫、灰田勝彦、田谷力三、渡辺はま子、ディック・ミネ、林伊佐緒、松島詩子、二葉あき子、藤山一郎、伊藤久男、赤坂小梅、市丸、小唄勝太郎）に関する雑誌記事の件数の推移を年代別に見ていったものが以下のグラフである。(91)



このうち、戦後一貫して芸能界をにぎわしてきた淡谷のり子を除いたグラフは、下のようになる。



このように、昭和 40 年代（1965～1974 年）後半以降に、往年の歌手が週刊誌上を賑わしているという事実が見えてくる。

最後に、「なつメロ」ブームの中で往年の歌手の社会的地位も見直されてきたという事態を述べておきたい。昭和 40（1965）年に東海林太郎が流行歌の歌手で初めて褒章を受章して以来、数々の往年の歌手が勲章・褒章を受章した。以下はそのリストである。(92)

歌手名	勲章・褒章名	受賞した年
東海林太郎	紫綬褒章	昭和 40（1965）年
	勲四等旭日小綬章	昭和 44（1969）年
	勲三等瑞宝章	昭和 47（1972）年
赤坂小梅	紫綬褒章	昭和 49（1974）年
	勲四等宝冠章	昭和 55（1980）年
淡谷のり子	紫綬褒章	昭和 47（1972）年
	勲四等宝冠章	昭和 54（1979）年
安西愛子	勲二等宝冠章	平成元（1989）年
市丸	紫綬褒章	昭和 47（1972）年
	勲四等宝冠章	昭和 56（1981）年
伊藤久男	紫綬褒章	昭和 53（1978）年
	勲四等旭日小綬章	昭和 58（1983）年
近江俊郎	勲四等瑞宝章	昭和 63（1988）年
菊池章子	勲四等瑞宝章	平成 12（2000）年

霧島昇	紫綬褒章	昭和 54 (1979) 年
	勲四等旭日小綬章	昭和 59 (1984) 年
小唄勝太郎	紫綬褒章	昭和 46 (1971) 年
	勲四等宝冠章	昭和 49 (1974) 年
田端義夫	勲四等瑞宝章	平成元 (1989) 年
ディック・ミネ	勲四等旭日小綬章	昭和 54 (1979) 年
並木路子	勲四等瑞宝章	平成 11 (1999) 年
灰田勝彦	勲四等瑞宝章	昭和 57 (1982) 年
林伊佐緒	紫綬褒賞	昭和 50 (1975) 年
	勲四等旭日小綬章	昭和 58 (1983) 年
藤本二三吉	紫綬褒賞	昭和 43 (1968) 年
	勲四等瑞宝章	昭和 50 (1975) 年
藤山一郎	紫綬褒賞	昭和 47 (1972) 年
	勲三等瑞宝章	昭和 58 (1983) 年
	国民栄誉賞	平成 4 (1992) 年
	従四位	平成 7 (1995) 年
二葉あき子	紫綬褒賞	昭和 57 (1982) 年
	勲四等瑞宝章	平成 2 (1990) 年
松島詩子	勲四等瑞宝章	昭和 53 (1978) 年
渡辺はま子	紫綬褒賞	昭和 48 (1973) 年
	勲四等宝冠章	昭和 56 (1981) 年

「なつメロ」ブームによって世間から再評価された往年の歌手が、社会的にも権威付けされたということが分かる。

3-8 「なつメロ」ブームを支持した層の反応

次に、「なつメロ」ブームの受け手であった当時の民衆は、このブームに対してどのような反応をしたのであろうか。ここでは、昭和 44 (1969) 年に発足した「なつメロ愛好会」の会報の記事から、「なつメロ」ブームの受け手の中でもその中核を担っていたであろう人々の様子を伺うことにする。

なつメロ愛好会は昭和 44 (1969) 年 6 月、観光絵はがきの出版業を家業で営んでいた福田俊二が結成した会である。それ以来福田は家業をやめ、会の運営となつメロ研究に没頭し、『あゝ懐しの日本映画主題歌集』(新興楽譜出版社, 1972) や『昭和流行歌総覧. 戦前・戦中編』(柘植書房, 1994) などの書籍を 10 冊程度刊行してきた。会の活動内容は会報の作成、往年の歌手を招いての全国大会や各種大会の開催、「長崎なつめる愛好会」「新庄なつメロ会」「湯沢なつメロ愛唱会」「上原敏の会」「田端義夫後援会」などの類似地方団体との交流・パイプ役などであり、最盛期には会員数 500 人近くを数え、地方の各都道府県に

は支部も存在するほどの全国団体である。会報は、会の発足である昭和 44（1969）年 6 月を創刊号として、それ以降 2 ヶ月に 1 号のペースで発行されている。記事の投稿には、一般の会員の他、ジャーナリストや歌謡史研究家、中には、往年の歌手や作曲家・作詞家といった、送り手の側だった著名人からも寄せられている。平成 12（2000）年 1 月の第 177 号を最後に、会長の福田俊二が亡くなった後は 2 年間会報の発行は止まるが、平成 14 年 2 月から、「新・全国なつメロ愛好会」として再出発し、以降は 3 ヶ月に 1 号のペースで発行されている。2007 年 1 月現在の最新号は、復刊第 20 号（通算第 198 号）である。

会報を眺めていてまず目に付くのは、当時まだ現役で活躍していた往年の歌手はもちろんだが、「なつメロ」ブーム以前に既に亡くなってしまった往年の歌手を懐かしむ記事が多いということである。以下にその例をいくつか紹介しよう。

- ・尾崎宏一「北廉太郎君を想う」, 会報創刊号, 昭和 44（1969）年, p.3
- ・片山久「噫々上原敏!」, 会報第 2 号, 昭和 44（1969）年, p.2
- ・福田和禾子「父（松平晃）の思い出」, 会報第 3 号, 昭和 44（1969）年, p.1
- ・宇多野好男「松平晃さん苦斗の半生」, 会報第 5 号, 昭和 45（1970）年, p.2
- ・レイモンド服部「亡友の思い出①（歌手篇）」, 会報第 6 号, 昭和 45（1970）年, p.5
- ・江口夜詩「松平晃君の思い出」, 会報第 7 号, 昭和 45（1970）年, p.1
- ・渡辺幸治「楠木繁夫の思い出」, 会報第 7 号, 昭和 45（1970）年, p.3
- ・大川晴夫「丸山和歌子と弥生ひばり」, 会報第 12 号, 昭和 46（1971）年, p.4
- ・篠崎俊夫「『山の女』弥生ひばりを讃う」, 会報第 15 号, 昭和 46（1971）年, p.3
- ・高原正「思い出は敏さんと共に」, 会報第 16 号, 昭和 46（1971）年, p.5
- ・久米茂「松平晃氏と太田畔三郎氏を思う——近江八幡の会に出て——」, 会報第 20 号, 昭和 47（1972）年, p.1
- ・大川晴夫「佐藤千夜子の世界」, 会報第 30 号, 昭和 49（1974）年, p.4
- ・森一也「徳山璉回想符（1）——美声・ユーモリスト」, 会報第 31 号, 昭和 49（1974）年, pp.2-3

もちろん、

- ・高橋掬太郎「『片瀬波』のこと」, 会報第 4 号, 昭和 44（1969）年, p.1
- ・庵原近之助「なつめろ余話（一）特別攻撃隊のうた」, 会報第 4 号, 昭和 44（1969）年, p.1
- ・氏原幸夫「私のなつメロ懐古 その一」, 会報第 9 号, 昭和 45（1970）年, p.3
- ・八巻明彦「『戦友の遺骨を抱いて』について」, 会報第 14 号, 昭和 46（1971）年, p.1・3
- ・大川晴夫「大阪の歌（上）」, 会報第 15 号, 昭和 46（1971）年, p.2
- ・今城英寿「思い出の愛染かつら」, 会報第 16 号, 昭和 46（1971）年, p.4

- ・井元清「長崎物語のこと」, 会報第 18 号, 昭和 47 (1972) 年, p.5
- ・門田ゆたか「懐かしいあの頃この歌——テイチクの思い出——」, 会報第 21 号, 昭和 47 (1972) 年, pp.1-2
- ・今城英寿「名花一輪“戦ふ花”」, 会報第 24 号, 昭和 48 (1973) 年, p.10

のように、歌自体を懐かしむ記事も多いのであるが、往年の歌手を懐かしむ記事の数はそれ以上に目立っているし、歌自体を懐かしむ記事にしても、往年の歌手と絡めて展開されているものが多い。中には、北廉太郎、弥生ひばり、丸山和歌子、如月俊夫、三丁目文夫といった、相当なファンでないと知らないようなマニアックな歌手について言及されているものも少なくない。

次に、「なつメロ愛好会」の会員がどのように当時の「なつメロ」ブームを捉えていたのかということ、実際にいくつか記事を引用することで見ていこう。

最近なつメロが盛んに唄われている。良い傾向だと喜こんでいるのは、私一人ではないと思う。(中略) 又これに輪をかいたように若い歌手の往年のなつメロヒット曲を発売、これ又相当な売行だときく。題して都はるみの流し唄、北島三郎なつつかしの演歌、森進一古賀メロディーを唄う、等々私達なつメロ愛好家にとっては、けだし万々歳である……。それなのに何是か物足りなさを感じる、どうしたことか。それはやはりなつメロは元唄(原盤)でと言う私の本来の好^{ママ}みからであろう。

新しい技術とすばらしい設備で効果を挙げ吹き込まれた唄も、それは一介の道化師の歌芸としか受けとれない。なつメロはやはり昔のままの多少針音はしても原盤を生かした LP 盤で発売してほしいものであると考える由遠。(氏原幸夫「私のたわごと」, 会報第 8 号, 昭和 45 (1970) 年, p.3)

テレビ又は各社のレコードメーカーで懐^{ママ}つメロにも関心を持つようになり、現在の歌手に昔^{ママ}しの歌を唄わせ曲も今式に編曲して売り出しているのがあるが、どうもピンと来ない感がある。(中略) 偶然にも私の欲いのがあった。同一人物が唄ったものだから、今は技術も進歩しているから定めし好いだらうと購入したのが何枚かありますが、如何せん只音が好いだけで曲は編曲され唄いかたその調子も異うのがっかり。随分無駄金を使ってしまいました。同一人物でも、この調子だから、他の歌手だったら押しで知るべし。(中略) このことはテレビでもいえる確かに原曲は同じだが、どうも唄い方も伴奏も昔^{ママ}しのとは一寸異う。希には似かよったのもあるが大部分はわれわれ懐^{ママ}つ

メロファンに本当の懐^{ママ}つメロ感を味わうには何だかものたりない。(鈴木竹蔵「私しの懐メロ感(上)」, 会報第19号, 昭和47(1972)年, p.10)

特に若い人達にも「なつメロブーム」が押し寄せている今日の現状です。五十代を過ぎ、停年間近な我々なつメロマニアにとりましては誠に喜ばしく、若者のカーステレオでなつメロを聞くにつけさながら旧友にでも巡り逢った様な親しみを感ずります。然し聞いてみて歌手が戦後生れの若輩歌手だったらがっかりします。と云うのは今の若輩歌手になつメロを唄う資格はないからです。

理由は現在の録音は信用できず録音技術の向上により下手糞の歌手の唄でもどんなボロでもテープの魔術によりツギハギでつくろいごまかしの機械音化されたニセ物だからです。

晴着姿で軍歌を唄う女性歌手の非常識さもさること乍らへんにバイブレーションをつけ、国籍不明のアクセントで然も手振り腰振り空手試合もどきゼスチャーは何としても不愉快です。

外国ナイズされた変な編曲で奇声に等しい歌はなつメロのよさをブチこわす何物でもありません。テープ出現以前のかつての往年のベテラン歌手の吹込はやり直しのきかない真剣の一発勝負、実力本意の録音だったからです。

今の機械音楽化した若手歌手吹込のなつメロの LP 及びテープは我ら真のなつメロマニアには無用の長物でこそあれ何ら心の糧とはならず徒に気分を不愉快にするのみです。

真のなつメロとはどんなに針音があろうが声がかすれていようが SP の原盤より録音した物を聞くことこそ最高の醍醐味です。

原盤でなければ真の演奏芸術を聞く事は不可能です。(渡辺幸治「一日四回の食事を」, 会報第23号, 昭和48(1973)年, p.10)

このように、コアなファンは、若手歌手のリバイバルを嫌い、「なつメロ」を歌うのは往年のオリジナル歌手、しかもレコード発売当時のオリジナル音源でなければ駄目だという姿勢を取っていた。

最後に、これらのコアな「なつメロ」ファンが、この当時第一線であった流行歌(歌謡曲)に対してどのような印象を抱いていたのかも見てみよう。

何と云っても昔^{ママ}の歌は詩、曲とも良いのが多い(中略)それに比べ現代のは非常にむずかしい唄いにくい、表現も歌手が身振手振しながら唄う本当に現代の歌手は大変だと思う。いわば現代の唄は容姿、表情を見ながら聞く唄というのでしょうか故に

何十年も残るものがない。(鈴木竹蔵「私しの懐メロ感(上)」, 会報第19号, 昭和47(1972)年, p.10)

近ごろの歌謡曲を聞いていて感じることは、そのほとんどが「歌う」という範疇の中に入っていないことだ。それは「ささやく」か「どなる」かあるいは「うなる」かといったものばかりである。つまり、真の意味の「歌」ではないということだ。(中略) かつて、小林千代子が、あるステージで、わざわざマイクから離れて歌うのを聞いたことがあるが、いま、そういう「実力」の持主は一人としていまい。(中略)

こういう歌とはいえない歌を毎日テレビやラジオで聞かされている故もあってか、古い歌手のオリジナル盤などを聞くと、何か救われた思いがする。少くともそこには、まともな「歌」がある。何よりも声そのものの質がいい。二葉あき子やミス・コロムビアの初期の歌など、文字通り「玉をころがす」ような美声である。

ところが、いまの歌手たちはむしろ悪声、奇声が多い。「ささやく」「どなる」「うなる」では、美声などはいらぬからだ。(中略) こんな「げてももの」ばかり競っている、しまいに歌そのものの喪失時代が来るだろう。現に、最近の歌謡曲——そして歌手もだが——の寿命の短さはどうか。(中略)

いわゆる「なつメロ」が、大人たちばかりでなく、若い層にも人気があるというのはそこに真の「歌」があるからだろう。(能戸清司「歌謡曲げてももの時代——なつメロの真の価値——」, 会報第24号, 昭和48(1973)年, p.1)

ここには、当時第一線の流行歌(歌謡曲)や歌手を徹底的に嫌った上で、あくまでも昔の流行歌や歌手とは差異化し、「昔は良かった」という風に昔の流行歌及び歌手を権威付けする構図が見えてくる。(93)

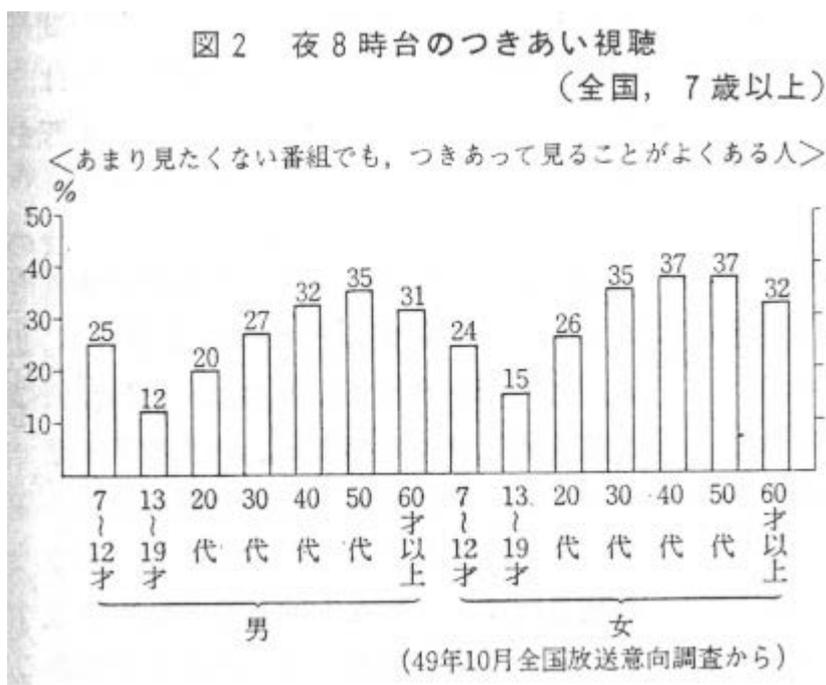
以上からは、コアな「なつメロ」ファン層が、往年の歌に対して、そしてそれ以上に、往年の歌手に対して、それらを権威付けしようとしていた姿勢が見えてくる。

3-9 「なつメロ」ブームを支持した層と当時の若者

昭和40年代(1965~1974年)の「なつメロ」ブームは、どのような層によって受容されていたのであろうか。当時の歌謡曲の流行周期の短期化とファン層の低年齢化に不満を抱いていたのは明らかに若年層ではなくて、30代以上の成年層だと考えられるし、事実「なつかしの歌声」は「40代後半の人たち」のための音楽番組として企画され、視聴者からの反響も大半は「三十代以上のオールドファン」であったということを考え合わせると、少なくとも「なつメロ」ブームの誕生を支持したのは30代以上の成年層であったと考えていであろう。『文研月報』昭和46(1971)年11月号にも、「視聴率からみると“なつメロもの”は高年層によく見られており、一方、今全盛の『ベスト10もの』はポップス調の歌で大部分をしめられているため、それにあきたらない、日本調・演歌調の歌を好む高年層

の人が、戦後 25 年というときの流れも手伝って、「なつメロ」に向っていると考えられる」と書かれている。〔牧田（1971：P.27）〕

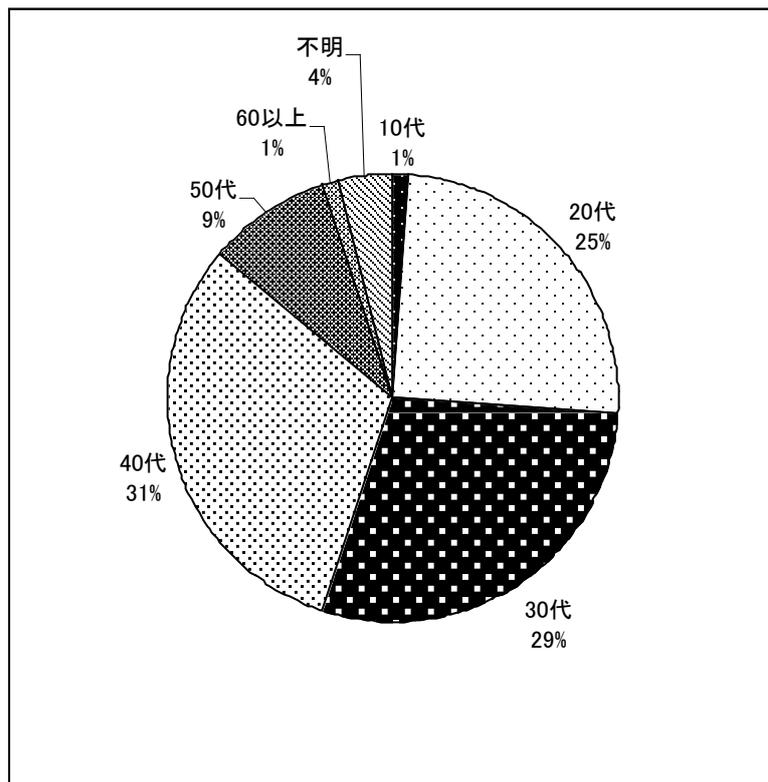
一方、当時は一家団らんのためにお茶の間で家族と一緒にテレビを見るという行為が盛んであったために、「なつメロ」に関心のない層も、「なつメロ」に関心のある家族と一緒に「なつメロ」番組を「つきあい視聴」していた可能性は十分に考えられる。しかしながら、以下の図 8 のように、夜の娯楽番組を「つきあい視聴」するのは中高年層に顕著なのであって、13～19 歳の年代はもっとも「つきあい視聴」する人の割合が低く、「つきあい視聴」が「よくある」と答えたのは、男子では 12%、女子では 15%に過ぎないという結果が出ている。以上を踏まえると、『なつメロ』には関心のない 10 代／『なつメロ』に関心を寄せる 30 代以上」という、大雑把な世代間の差異は存在していたと考えられる。



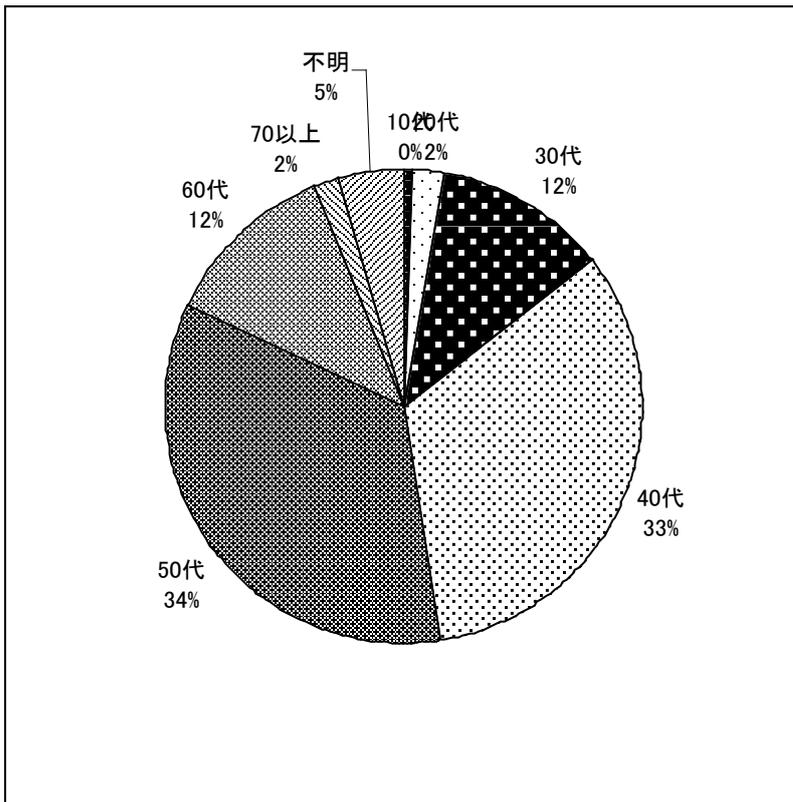
(図 8 「夜 8 時台のつきあい視聴」, [本田（1977：p.23）] の図による)

もっとも、若者の中にも、「なつメロ」に思いを寄せる者は存在していた。例えば、「なつメロ愛好会」の会員の年齢構成は以下のグラフのようになっている。

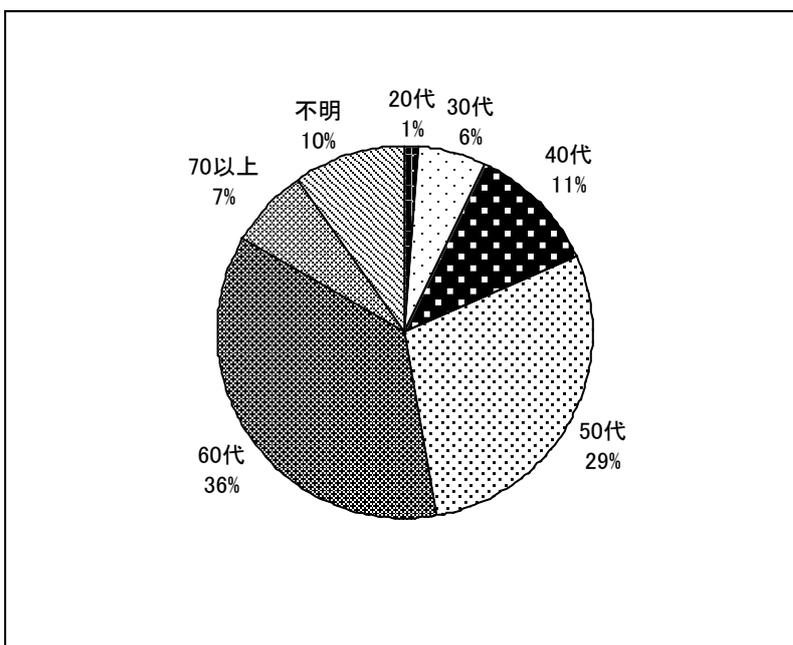
<会員の年齢層>



会報第5号（昭和45（1970）年1月10日現在）より
会員数100人、最年少16歳、最年長60歳、平均37.6歳



会報第 60 号（昭和 54（1979）年 3 月 5 日現在）より
 会員数 462 人、最年少 18 歳、最年長 88 歳、平均 49.2 歳

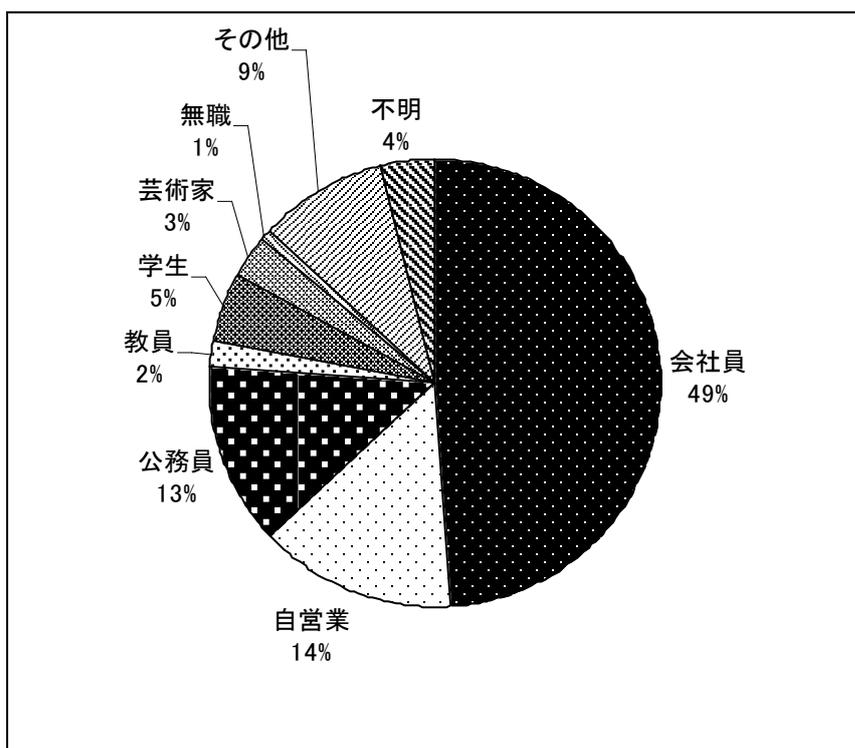


会報第 122 号（平成元（1989）年 7 月 20 日現在）より

会員数 186 人、最年少 26 歳、最年長 81 歳、平均年齢 56.7 歳

「なつメロ愛好会」は会員の増減が激しいが、昭和 44（1969）年の発足当初から 20 年後に到っても、会員の年齢層はスライドしており、一貫して 1920 年代～1940 年代生まれの層がメインとなっていることが分かる。ここで注目すべきは、「なつメロ愛好会」で扱っている「なつメロ」とは、大半が昭和戦前期の流行歌であるにもかかわらず、その頃に生まれていなかった、もしくは、物心がついていなかったと思われる 1940 年代（昭和 15～24 年）生まれ以降の会員が少なくないという事実である。

なお、昭和 45（1970）年 1 月 10 日現在での会員の職業構成は以下のようになる。実際



会報第 5 号（昭和 45（1970）年 1 月 10 日現在）より

会員数 100 人、最年少 16 歳、最年長 60 歳、平均 37.6 歳

には、住宅会社、金属塗装、マッサージ師、新聞社、電報局、作曲家、保母…と多種多様である。職業を類型化するに当たっては、国鉄に勤める者、電報局、郵便局、保健所は公務員として、保母は教員として、マッサージ師、左官業、植木職、会社役員などはその他にした。

職業の分布から分かることは、まず第一に、ホワイトカラー、ブルーカラー、自営業とほぼ均等に構成されているということである。特に、ブルーカラーが多い、公務員が少ない、学生が少ない、などといった目立った特徴はない。また、年齢構成で 50 代以上の者が少ないため、定年退職している者がほとんどいないということが挙げられる。以上から、

こういった階層が「なつメロ」の中核的なファンであったのかということ判断することは、極めて困難であると言わざるを得ない。

では、当時「なつメロ」に関心を寄せた若者達は、「なつメロ」をどのように捉えていたのであろうか。まず、「なつメロ愛好会」の会報に寄せられた記事から内容を見ていこう。

先ほど見たように、「なつメロ愛好会」の会員には、戦争を知らない世代も少なくないが、会報に記事を寄せているのは、見た限りでは、戦争を体験した世代からのものが大半で、戦争を知らない世代からのものは少ないように感じる。その中で、戦争を知らない世代からの投稿をいくつか引用しよう。

この度、私が趣味の一環として浅い人生の中で共に生きてきた、“懐しのメロディー”題して“懐メロ”が有効に生かされる唯一の機関、そして同好の人々と楽しく交わる場としての“懐メロ愛好会”に入会できましたことは、誠に嬉しく、有難たく思っている次第です。(中略)

現在の歌謡曲と昔の歌謡曲とは歌詞、メロディーの違いも多々ありますが、基本的に異なる所は歌い手自身の気持ちであり、歌に対する思いやりではなかろうかと思うのです。決して、現在の歌謡曲は“悪い”と一概に否定は出来ないし、私自身もその様に努めておりますが、正直の所申しまして良く思っていない状態です。(中略)

つい最近の「文芸春秋」に東海林太郎先生の「現代の歌謡曲は真の歌ではなく又、歌い手は真の歌い手でもなく、特にグループ・サウンズと称するものの歌は歌ではなく一つの音にすぎない。」という記事が載っておりましたが、正しくその通りだと思いました。

“懐メロ”に関しては何時頃から興味を覚えたかと申しますと、それははっきりと自分でも判らず、限定して時期をお伝えすることは出来ません。(中略)とにかく“懐メロ”を愛するという生天的素質を持って生まれたのだと思う外はありません。(中略)

私が人前で始めて“懐メロ”を歌ったのが高校三年の秋、クラスのコンパの時でした。皆がその当時の流行り歌を歌う中で私は担任の先生に頼んで一緒に伊藤久男の軍歌「暁に祈る」を歌ったことがあります。(日本大学 4 年平井建治「“ナツメロ” 想うまま (上)」, 会報第 2 号, 昭和 44 (1969) 年, p.4 及び「“懐メロ” 想うまま (下)」, 会報第 4 号, 昭和 44 (1969) 年, p.3)

数多い歌謡番組^ミの中で、昔の歌が聞ける唯一の番組は東京 12 チャンネルの「なつかしの歌声」、すばらしい番組だと思います。

私たち若い者にはあまり歌われぬ歌が出てくる。しかし、往年活躍された歌手の顔を見ながらヒット曲を聞くと、必ず胸にジーンとはねかえるものを感じる。歌は生

きているのである。(中略)

リズム歌謡全盛の現在、なつかしい歌のよさを認める若い層の支持も多いようだ。なぜならば、古いもの程価値があるとはこのことか。(森井勝也「対称的な『胸にジーンとくるなつメロ!』『いまの歌は線香花火!』」, 会報第 6 号, 昭和 45 (1970) 年, p.1)

東海林太郎の歌は、私のように伊那の故郷を離れて、北信濃の山村で仕事をしている者にとってほんとうに心の支えになってくれる。私は戦後生まれで戦後育ちだから、東海林太郎の歌は、父、母から聞き覚えたりして、ほとんど最近知ったにすぎない。(中略)

私の心の支えをつくってくれた東海林太郎に私は感謝している。東海林の歌はあらゆる面で人々の生活と密着し、支えとなり現在も生き続けている。(原俊弘「東海林太郎の歌」, 会報第 22 号, 昭和 47 (1972) 年, p.4)

次に、「なつメロ愛好会」への投稿ではないが、会報のとある号では、以下のように 14 才の中学生の発言が紹介されている。

最近の朝日新聞の投書欄に一四才の中学生が次のような意味のことをいっていた。

即ち先ずいしだあゆみの「今日からあなたと」をとりあげ歌詞を紹介して……こんなわけのわからない歌がヒットしている不思議さを述べ……この歌に限らず最近流行している歌謡曲の多くは実にくだらない歌に思われてならない。美しいメロディーにしっかりした歌詞の、昔の歌謡曲をくらべて今の歌謡曲の何とくだらない事でしょう。…中略…昔の歌謡曲が社会的なものや、当時の人々の気持を表していたのに対し、今の歌謡曲の多くが、そんなものとは別の恋とか愛とかをテーマにしたものばかりで、

その歌詞も昔の叙情詩的なものと違って、ある特定の単語を並べたよう簡単なものがほとんどで、ひどいになると女の名前だけの歌詩もあります。…中略

これは一四才の中学生の心に写った偽のない現代の歌謡界の姿であると推察され、(後略)(岩本博舟「思い出の懐メロ歌手(第二回)」, 会報第 8 号, 昭和 45 (1970) 年, p.4) (94)

続いて、ラジオ関東の「この歌あの人」の番組中の「お便りコーナー」で、19 歳の学生から以下のような手紙が読まれている。

拝啓 毎週この時間を楽しみにしている 19 歳の学生です。私は、現在の歌謡曲よりもなつメロの方が大好きです。第一に、今の歌手と比べて、とても歌が上手く、又、

メロディーが非常に綺麗だと思うからです。番組の構成も大変良く、あまり知られていない曲から大ヒット曲まで幅広く取り上げられ、ゲストとの対話も、昔の苦労話など聞かせてくださったりしてバラエティーに富み、内容豊かな番組だと思います。どうかこの番組がいつまでも続きますよう、お願い致します。(ヤナギマサト「お便りコーナー」、『この歌あの人』昭和 45 (1970) 年 5 月 3 日放送 (関東地区)、引用文は引用者の聞き取りによる)

また、昭和 12 年に流行歌手としてデビューした一色皓一郎の自宅を、22 歳の福田忠博という若者が訪ねるとい記事があるが、そこで福田は以下のように語っている。

福田 ぼく、四年ほど前は長崎の佐世保に住んでいたんですけど、“なつメロ”が好きで、中学一、二年生のころから、ラジオでなつメロ番組をききはじめてたんです。それとたまたま父が、勝太郎の「明日はお立ちか」の SP をもっていて、その裏に、一色さんの「昭南島ぶし」が入っているのをきいてすっかりファンになってしまったんです。

一色 すると、福田さんはわざわざ佐世保からいらっしゃったんですか。

福田 いや、ちがいます。佐世保では、好きな“なつメロ”が思うようにきけなくてそうしたら友達が「大阪へゆけば、なつメロ番組をいろいろなラジオで放送している」というので、大阪で就職したのです。ですからいまは東大阪に住んでいます。それでこの間、近畿放送の「この歌あの人」で、一色さんが出て歌っているのをきいて、たまらなくなつて。

一色 そうですか、それにしてもお若い、おいくつですか、こんな若い人がなつメロに、それも私のようなものの歌に興味があるんですかね。

福田 そうなんです。いまの歌をきくとアレルギー症状をおこし、ジンマシンが出るほどです。歳は二十二歳、昭和三十年生れです。(中略)

一色 それにしても、福田さんのような若い方が、なぜ昔の歌が好きなのか、私にはわかりませんね。

福田 やっぱ、昔のうたには、日本の情緒があり、いまの歌からは求められないものがあるからですね。「あの人はいま……—歌声は永遠に消えず」, pp.35-36、会話中の太字は引用者による) (95)

以上、当時「なつメロ」に関心を寄せていた若者の文章をいくつか拾ってきた。このことから分かることは、3-8 及び注の (93) で見てきたように、「なつメロ」をリアルタイムで受容してきた年配の「なつメロ」ファン及び往年の歌手と同じように、これらの若者達も、「現代」の歌や歌手より「昔」の歌及び往年の歌手の方が良かったという感情を抱いているということである。特に、平井、福田、朝日新聞に投稿した 14 才の中学生の三者に

到っては、はっきりと「現代」の歌や歌手を嫌悪している。

もっとも、「なつメロ」を愛好する若者の中には、「現代」の歌や歌手を嫌悪する者ばかりではなかった。現在、「昭和歌謡倶楽部」(96)の会長を務めているO氏は、昭和27(1952)年生まれであるが、昭和40年代(1965～1974年)当時から「なつメロ」に関心を抱いていた。O氏の話によると、昭和41(1966)年当時、関西地方で昼にテレビで放送していた「アフタヌーンショー」という番組に東海林太郎が出演して歌っているのを聞いて以来、「なつメロ」の良さを知るようになった。当時の「なつメロ」番組としては、「なつかしの歌声」、「帰ってきた歌謡曲」、「この歌あの人」が印象に残っているという。そして、昭和46(1971)年には「なつメロ愛好会」に、昭和47(1972)年には「岡晴夫を偲ぶ会」に入会している。このように「なつメロ」を愛好し始めたO氏であるが、当時の若者の音楽であったグループ・サウンズも普通に聞いており、抵抗感はなかったようだ。(97)

このように、「なつメロ」を愛好していた若者は、リアルタイムで戦前などの流行歌に接していた中高年層と同様に、「現代」の歌や歌手に嫌気がさして熱中した者と、それほど「現代」の歌や歌手に嫌気がさしていたわけではない者との二者が存在していた。そして、嫌気がさしていた層の方が多数を占めていたという感じを受ける。両者に共通しているのは、何らかのきっかけで「なつメロ」を知り、「現代」の歌や歌手には無い何かに惹かれて「なつメロ」を愛好し始めたという点にある。

以上は「なつメロ」を愛好していた若者の実態を見てきたが、それでは、若者全体の「なつメロ」に対しての反応はどのようなものであったのだろうか。これも、まずは当時の新聞からいくつか関連するものを引用しよう。

(東海林太郎は)若い人の間でも、「本物の芸人」として評判がよかった。「歌謡史研究」というミニコミを出している野沢あぐむさん(二七)は「東海林さんの時代は、歌手の人間的側面と歌とが結びついた時代だった。今の歌謡曲は商品だから、東海林さんのような人はもう出る余地がない」と残念がる。

若者に人気のあるフォーク歌手、泉谷しげるさん(二四)は「若い人でもきらいだという人はいないだろう。あの時代の人に共通した、何かに徹底するという芸人氣質が感じられるからだ。でも、歌そのものはどうしても聞きたいというものじゃなかった。それがいいといえば、それまでだが、いつも鼻歌で終わってしまい、心の歌になっていなかった」という。また、ロックバンド「頭脳警察」のトシ君(二一)は「ああ、あの直立不動のおじさんね。歌はただ、古くて、古くて……」。(「歌謡曲 大衆の心に生きる道——東海林太郎さんの死」、『朝日新聞』昭和47(1972)年10月5日朝刊、p.22、冒頭の括弧内・太線は引用者による)

*NHK「若いこだま」班が都内二十大学でヤングのナツメロ・アンケートをしたとこ

ろ、軍歌からビートルズまで千差万別だったが、上位には「鉄腕アトム」「ひょっこりひょうたん島」などテレビ主題歌が名を連ね、テレビ文化の申し子世代を象徴。歌手は加山雄三、沢田研二が双へきだった。その一方、父親ゆずりか東海林太郎、霧島昇などにも人気があって、古さも重要なファッションポイント。ビートルズで育ったような世代だがコンパで歌うのは「達者でナ」「人生劇場」「高校三年生」。(「ナツメロはTV主題歌」, 『朝日新聞』昭和 52 (1977) 年 12 月 7 日号朝刊, p.24)

1 つ目の引用の泉谷しげるや「頭脳警察」のトシ君の反応が、「なつメロ」には特に関心を示さなかった若者の態度であろう。また、O 氏の話によると、昭和 40 年代 (1965~1974 年) 当時の若者の大多数は、「なつメロ」に抵抗感はないが積極的には応援しなかったとのことである。ここでは、たとえ「なつメロ」に関心を示さなかった若者にしても、東海林太郎や霧島昇といった往年の歌手の存在は知っており、特に嫌悪感を抱いていなかったということに注目したい。「なつメロ」を愛好していた層に、「現代」の歌や歌手を嫌悪する者が多かったという事実とは対照的である。昭和 40 年代 (1965~1974 年) の「なつメロ」ブームは、たとえ彼らに関心を持つようになろうがならなかろうが、若者達にも往年の歌手の存在を知らしめたということに意義の 1 つがあるだろう。そして、「なつメロ」に関心を抱くようになった一部の若者が、新たにブームを盛り立てていったことは間違いないであろう。

3-10 「なつメロ」という語の拡散

『なつかしの歌声』放送全記録によると、昭和 40 年 (1965~1974 年) の「歌謡百年」の時期には、10 月 1 日「あゝ活動大写真」(出演: 栗島すみ子、熊岡天堂、竹本嘯虎: 無声映画華やかなりしころの歌やフィルムをつづりながら、その時代を回顧)、10 月 22 日「われらの青春」(出演: 東京六大学応援団、東京混声合唱団、田浦美津路: 寮歌特集)、10 月 29 日「浅草オペラ華やか」(出演: 田谷力三、藤原義江、東京混声合唱団) などのように、明治・大正時代の歌も特集として扱っていた。しかしながら、3 年後の「なつかしの歌声」の段階になると、明治・大正時代の歌はほぼ扱われていない。これは、「帰ってきた歌謡曲」や「この歌あの人」などの、同時期の他の「なつメロ」番組にしても同様である。それでは、いつの時期の歌を扱っていたかという点、昭和初期~昭和 20 年代 (1945~1954 年) までの歌、それも流行歌がほとんどであった。(97) 「なつかしの歌声」の番組が出した書籍である [三枝・永来 (1970)]・[三枝・永来 (1971)] にしても、内容は昭和初期~昭和 30 (1955) 年までの流行歌史を編年体でまとめ上げたものであるし、「なつメロ愛好会」で扱う「なつメロ」にしても、昭和初期~昭和 20 年代 (1945~1954 年) の流行歌が大半を占めている。よって、昭和 40 年代 (1965~1974 年) の「なつメロ」ブームにおける「なつメロ」とは、基本的には、昭和初期~昭和 20 年代 (1945~1954 年) の流行歌のことであると判断してよい。大正時代以前の歌が「なつメロ」として排除されたことには、当時の

「なつメロ」中心享受層としてのターゲットが、60代や70代の老年層ではなく、30代～50代の中高年齢層であったという事実が影響していると考えられる。(99)

昭和30年代(1955～1964年)という時期は、戦前にデビューした歌手が第一線を完全に退く時期に当り、昭和30年代(1955～1964年)以降の歌は「なつメロ」とは認識されていなかったのだが、昭和45(1970)年を過ぎる頃から変化が訪れる。「なつかしの歌声」では、まず昭和44(1969)年11月11日放送の回で、初代コロムビア・ローズ、三条町子、照菊、中島孝、生田恵子、大津美子、藤島桓夫がゲストであり、昭和25(1950)年以降にデビューし、昭和20年代後半から昭和30年代前半(1950～1959年)にかけて活躍した歌手の特集を初めて行なっている。昭和45(1970)年4月28日の放送では、佐川満男、守屋浩、花村菊江、松山恵子、藤本二三代、井上ひろし、五月みどりがゲストで、さらに2週間後の5月12日の放送では、村田英雄、西田佐知子、和田弘とマヒナスターズ他がゲストで、それぞれ昭和35(1960)年ごろの歌の特集を行なっている。これ以降、昭和30年代(1955～1964年)を代表する歌手がたびたびゲストとして招かれ、歌を歌っている。(100)夏や大晦日の特別番組でも、昭和45(1970)年大晦日の「なつかしの歌声・第3回年忘れ大行進」からは、昭和30年代(1955～1964年)前半の歌まで対象を拡大している。(101)三枝氏の話によると、こういったことは、「なつかしの歌声」を放送していくうちに時代が移り変わった結果だとしている。

NHKの「思い出のメロディー」でも、年々昭和30年代(1955～1964年)以降に活躍した歌手の出演の割合が増していっている。「思い出のメロディー」には、森進一、森山良子、青江三奈、鶴岡雅義と東京ロマンチカ、和田アキ子、尾崎紀世彦といった、昭和40年代(1965～1974年)にデビューした歌手も出演している。もっとも、昭和46(1971)年の第3回までは、取り上げる歌は昭和30(1955)年ごろまでのものが中心で、若手歌手にはそれらの歌をリバイバルさせていたようである。しかしながら、昭和47(1972)年の第4回からは、昭和40年代(1965～1974年)以降のヒット曲も特集するようになっていく。昭和30年代や40年代(1955年～1974年)の歌を特集することは、若者にも見てもらえるようにとの企画の結果であり、実際若者からの好評を得たようである。『週刊平凡』の昭和49(1974)年8月8日・8月15日合併号の特集記事では、この年の「思い出のメロディー」に寄せられた視聴者からのリクエストが紹介されているが、「湯の町エレジー」(昭和23(1948)年)や「支那の夜」(昭和15(1940)年)、「国境の町」(昭和9(1934)年)と並んで、森進一の「おふくろさん」(昭和46(1971)年)がリクエストされた様子が記載されている。

涙ながらにうたう悲しい思い出。熊本市内で飲食店を経営するAさん(39歳)は、森進一の『おふくろさん』の中に、自分の母の面影を探ってしまうという。

《母が死んだのは、私が7歳のときです。小学五年のころ、近くの夜店のダンゴ屋さん、母とそっくりのおばさんがいました。私は毎晩のように、そのダンゴ屋に出かけました。母が恋しかったのです。

昨年の『紅白』で、森進一さんが『おふくろさん』をうたったとき、私はこらえ切れずに涙を流してしまったものです。子供たちが心配して、しまいには聞きませぬ。しかし、この『おふくろさん』を聞くときの悲しさだけは、だれに話してもわかってはもらえないでしょう。」(中略)

さて、こんどNHKにリクエストされた曲数は、ざっと1500曲あった。78万3210通のハガキの3分の2が、女性からのものだ。

NHKでは、その中の上位100曲を選んだ。それからまた、50曲にふるいをかけたものが、ことしの『思い出のメロディー』でうたわれる曲目ということになった。

その上位5曲をあげれば、①『おふくろさん』、②『悲しき口笛』、③『高校三年生』、④『影を慕いて』、⑤『人生の並木路』ということになるらしい。(中略)

今回、曲目を選んだ主役は視聴者になる。しかも見渡したところ、ことしの選曲にはきわだった特色がある。

“思い出のメロディー”というには、いささか新しすぎる曲が多いのである。

たとえば、リクエストの1位にランクされた『おふくろさん』が、それであろう。昨年の『紅白』に登場したことでわかるとおり、この曲は46年に発表されている。わずか3年弱しかたっていない。

このほか、46年に発表されたものとして『また逢う日まで』(尾崎紀世彦)と『わたしの城下町』(小柳ルミ子)もある。

あるいはこのあたりが、“懐かしのメロディー”と“思い出のメロディー”の違いかもしれない。

「とにかくNHKとしては、コンピューターまで動員して、今後“スタンダード”として残るような曲を選んだつもりです。やはり圧倒的に多かったリクエストは、**演歌でしたね**」

末盛憲彦チーフ・ディレクターはこういう。この末盛さんの話によると、視聴者から寄せられたリクエストのほとんどが、歌手の指名までしてきているらしい。(「生まれる前の歌を揃ってうたう野口五郎・西条秀樹のとまどいとある不安——NHK『思い出のメロディー』の放送されない、影の内幕」、『週刊平凡』昭和49(1974)年8月8日・8月15日合併号、pp.57-60、太字は本文に沿っている)

引用文中の「おふくろさん」は昭和46(1971)年の、「悲しき口笛」は昭和24(1949)年の、「高校三年生」は昭和38(1963)年の、「影を慕いて」は昭和7年の、「人生の並木路」は昭和12(1937)年の曲であり、年代がバラバラである様子が伝わってくる。「なつメロブーム」初期においては、「なつメロ」とは昭和20年代(1945~1954年)までの流行歌のことである」という暗黙の了解が存在していたと言えるが、昭和40年代(1965~1974年)の後半に入ると、このように「なつメロ」の時代範囲が次第に曖昧になってきたということが分かるであろう。(102)

「なつメロ」番組上においてだけでなく、週刊誌の記事を追っていても、この頃から「なつメロ」として昭和 30 年代（1955～1964 年）以降の歌や歌手が取り上げられるようになってくる。『週刊 TV ガイド』では、昭和 45（1970）年 8 月 7 日号と翌年の 46（1971）年 8 月 13 日号が「なつメロ」特集となっているが、前者が昭和 20 年代（1945～1954 年）までに活躍した歌手のみを扱っているのに対して、後者ではそれらに加えて、浜村美智子、渡辺マリ、平尾昌晃といった、昭和 30 年代（1955～1964 年）に活躍した歌手も「なつメロ」歌手として取り上げている。

また、この時期は、「なつメロ」が若者のものになっていく時期でもあった。それ以前の「なつメロ」は、若者にとっては自分が生まれる前のものであり、そこに新鮮さを見出し、いくものに過ぎなかったのだが、この時期に到ると、若者が自分の過去を振り返って懐かしいと思う歌全てが「なつメロ」として見出されていくようになっていった。例えば、『女性セブン』昭和 47（1972）年 8 月 9 日号では、20 歳の志垣太郎が「サウンド・オブ・サイレンス」を、24 歳の中山千夏は、自らが歌った「あなたの心に」という歌をそれぞれ自らの「懐かしのメロディー」として語っている。(103) 同じく『女性セブン』昭和 53（1978）年 5 月 11 日号では、「ヤングにはヤングの“ナツメロ”があるのです。ラジオやテレビの人気番組の主題歌、青春歌謡、ポップス… あなたはどんな曲を覚えていますか？当時を思い出しながら口ずさんでください…」との書き出しの下に、昭和 30 年代後半から昭和 40 年代（1960～1974 年）にかけての青春歌謡、和製ポップス、テレビまんがの主題歌が「なつメロ」として取り上げられている。(104) また、『週刊読売』昭和 50（1975）年 10 月 18 日号でも、「20 代の諸君！オレたちにもすでに回想があるのだ！」という特別企画の元、昭和 30 年代（1955～1964 年）の歌謡曲とテレビ主題歌が取り上げられている。(105)

この時期に、昭和戦前期や昭和 20 年代（1945～1954 年）の流行歌が「なつメロ」でなくなったわけでは決してないが、「なつメロ」という語が表す対象の範囲が拡散した結果、《「なつメロ」である／ない》のバイナリー・コードが氾濫していく過程を見ていくことが出来るであろう。(106)